

メゾン

大村伸一

1 理想的な到着

しばらく前から目覚めていたが目は開けなかった。うつ伏せのまま真新しいシーツの肌触りとアイロンのにおいを味わった。最初、ホテルにいるものだと思っていたが、すぐにホテルに泊まった記憶のないことに気づいた。寝ぼけた感覚の中で迷い少し考えてから、今日が休みだったことを思い出した。普段、仕事でなければ旅に出ることもなくホテルに泊まることはない。おかしいことになっていると気づき、ようやく目を開いた。照明は薄暗かったがこれまで泊まったことのないその部屋が広いことは分かった。ベッドの上に座り込み見回すと、本棚や小さな衣装ダンスがある。ホテルと言うよりも誰かの住居のようだった。

ベッドから降りると自動的に照明が明るくなり、壁に埋め込まれたテレビのスイッチが入ってニュースが流れ始めた。

「おはようございます。今朝の気温は十九度。とうとう二十度を切ってしまいました。今日最初のニュースです。一〇〇一七号室キジマヒョウソウさんは昨夜、五千ピースのパズルを完成しました。始めてから一週間、お疲れ様でした」

画面には何かの植物の葉が映されていたが、カメラが近づきすぎていてピントは合っていなかった。

隣の部屋にも人の気配はなかった。部屋に入り照明がつくと、白いテーブルクロスをかけたテーブルがあり、椅子がふたつ向かい合わせに置かれていた。テーブルの中央には球形のガラス鉢が置かれている。鉢の中は空っぽだった。部屋の家具はそれだけしかなかった。ただ、壁には寝室より幾分小型のテレビが埋め込まれていて、ニュースの続きを読み上げた。

「次のニュースです。一〇〇一七号室のウズキカガクさん宅の水道が昨夜止まらなくなりました。どんな呼び出しにも用意怠りのない緊急隊ぬ一五三は即座に出動し、滞りなく水道を復旧しました。復旧までにかかった時間は十分二十二秒。今月の最短記録です。今夜の管理部門の表彰式が楽しみです。緊急隊ぬ一五三の獲得したメダルは今年に入ってからすでに十七個。年間最優秀賞もこれで決まりでしょうか。おめでとうございます」

もうひとつ隣の部屋にも誰もいなかった。壁際に皮張りの肘掛け椅子が一脚とサイドテーブルが置かれていた。テーブルの上に四角いプラスチックの切れ端のような物があつた。手に取るとそれは切符だと分かった。硬い表面には、自分の住んでいる町の名前が印刷されていた。乗車駅は掠れていて読めなかった。これが私の切符なら旅先から今日帰宅する予定

だったのだろうか。記憶では、昨日も休暇で自宅にいて、自宅で休んだ。何故ここにいるのかさっぱりわからなかった。

「次のニュースです。一〇三〇一号室のイビキコドクさんは病気です。喉の痛みに苦しみ夜の間中高熱が続きました。医師のオオメダマガンセキ先生によると、死ぬまでの余命は残っているとのこと。温かくして休養してください。お大事に」

次のドアを開けると部屋はなく、そこは外だった。外であることは分かったが外に何があるのかは分からない程度に暗かった。しかしドアを出ればやはり自動的に照明がつき、窓のない通路が左右に続いていた。通路は横に広く天井は低かった。光の具合で床も壁も滑らかな素材でできているように見えたが、触ってみるとデコボコで、傷みを隠す塗装が何重にも重ねられているようだ。建物は思いのほか大きく、通路の先は闇に隠れて見えない。手を離すと扉は背後で静かに閉じていった。中に戻れなくなるのではないかと思ったが、考えてみればそれで不都合はなかった。通路のどちらに行こうかすこし迷い左の方へ歩くことにした。

通路の壁には装飾はなく、ただ長い距離をあけて同じ作りの扉が繰り返されているのが、それが装飾なのだと言えなくもない。扉の形はほとんど同じだったから、もし戻りたいと思ってもあの部屋を見分けるのは難しいだろう。唯一の違いは、どの扉にもある見たことのない模様だけだった。それが部屋の番号を示しているのではないかとも思ったが、同じ形の模様はほとんどなかったから数字ではないのだろう。あるいは名前なのかもしれない。

通路を進むと前方の照明がつき、背後の照明は消えていった。どれだけ進んでも、通路の先の暗闇がなくなることはなかった。しかし通路を何度か曲がるとその先の方に照明の消えていない一角が見えた。近づくと、そこは壁一面がガラス張りになっていて、室内の明りが通路に落ちているのだった。ガラスの内側には商品棚が幾つも並んでいるのが見えた。何かの店なのだろう。店に入ると奥から小柄な男が出てきた。親しみを込めた笑顔を見せ、何かお探ですかと尋ねた。

「こんな早くから開いているんですね」

「お客様はいらっしゃいませんが、規則ですから」

「規則はどんな場合でも厳しいものです」

「管理部門の方ですか」

すると店主は管理部門に知り合いがないのだ。

「誰にも言わないでください」

店主の耳に顔を近づけそうさきやくと店主は胸の前で両手を揉み合わせながら何度も頷いた。

「何でもお申しつけください」

そう言われて店の中の空っぽの棚を見回してから聞いた。

「この店はなんでも売っているのですね」

「さすがお目が高い。空の棚はあらゆる商品の可能性で溢れています。それが商売の要でもあります」

その応えにうなずきながら、主人を試すつもりで凧がないかと尋ねた。

「今、入荷したばかりです」

店主は要望に応えられたことがさも嬉しそうにそう言うと店の奥に入って、凧の入ったビニール袋を持ってきた。

「強風でも壊れませんよ。百メートルの凧紐つきです」

そう言って袋を渡すと、一歩下がって立っている。次の注文を待っているようだった。それ以上欲しいものはないのだと一度頷き、上着のポケットに手を入れ財布を探した。財布はなかった。忘れて来たのだろう。その代わり指に硬い物が触れたので取り出すとそれは切符だった。主人は切符を見て驚いたようだった。

「初めて見ました。銀色の切符ですね。夜中に越して来られたのは、やはりあなたでしたか。光栄です。凧は差し上げますよ。入居祝いです。遠慮なさらずに」

誰かと勘違いしているようだったがありがたいとだけ答えた。それから、凧を飛ばしてみたいので建物の外に出るにはどうすれば良いかを尋ねた。

「建物の入口はすぐそこです」

店主は通路に出て今来た方向を指差した。

「ですが、凧をあげるのは難しいかもしれません」

もう一度ありがたいと言うと、来た道に戻った。

自分のいた住居の扉を過ぎしばらく進むと玄関だった。玄関の扉はガラス張りで外がよく見えた。鍵はかかっていなかったなので外に出た。建物の周囲の種類は分からないが太く高い木々が取り囲み、重なり合う葉に閉ざされて空は全く見えなかった。建物の二階の窓さえ、どれも森の木の葉が隠して見えない。風に揺れ葉と葉の擦れ合う音が不規則に森の中を流れた。確かに、凧を揚げる空間はなかった。それでも、空き地を探して凧の袋を手にもって森の中に入った。

幹と幹の間には人一人が身体をくねらせてようやく通り抜けられる隙間しかなかったので、凧の袋が枝に引っかからないように注意しながら進んだ。地面は濡れていて滑りやすく、ころばないように幹にしがみつぎながら進んだのですぐに服は土で汚れ体は冷たくなった。三本の木をすり抜けると背後の建物は木の陰になり見えなくなった。

周りを囲むどの木にも幹と同じ模様が浮かんでいた。鳥の目のようにも見え、列車の車輪のようにも見え、方角を示すコンパスのようにも見え、自然にできたものとは思えなかった。森の中で迷わないように印をつけてあるのだろうが、どの幹も同じ模様なのでかえってどこにいるのか分からなくなりそうだ。

幾度目かに足を滑らせ幹を掴み損ねて倒れたとき、手をついた下生えは乾いていた。目の

前にもう木はなくなり森から抜け出していることに気づいた。膝をついて立ち上がると、目の前にまた建物があった。この建物も木に隠され二階から上は見えなかった。玄関ポーチはさっきの建物と同じ形でガラス張りだった。同じ設計図で建てられたものなのだろう。すこしも区別がつかない。近づくと玄関の明りがついた。ガラスのドアが開く前に、玄関の内側に人影が見えた。あの店主が立っていた。

「もうそろそろ思っていました。おかえりなさい」

表情は見せないようにして服の土を払いながら挨拶を返した。森を振り返ったが入ったときと同じ森のようにも見えたし、全く違う森のようにも見えた。

「国道はどこなのでしょう」

そう尋ねると、店主は答えをためらい、何も言わなかった。

「地図があれば欲しいのですが」

そう付け加えて言うと店主は笑顔をやめ、建物の天井や壁に取り付けられたカメラを気にし始め、疑いを匂わせる口ぶりで言った。

「地図は私の店では扱っていません。地図はカイチョウから貰ってください」

「カイチョウ」というのが「会長」なのか「階調」なのか、あるいはそのどちらとも違う何かなのかは見当もつかなかった。だが、店主の態度が冷ややかになったので、それを聞きなおすのはためらわれた。

「カイチョウに会わせてもらえますか」

それだけを言った。

店主に案内を頼み、カイチョウの住居まで一時間歩いた。時々、通路の床に大きく円や三角の図形が鮮やかな色使いで描かれていたが、その意味を店主に聞いても答えてはくれなかった。何を意味するのか誰にも分からないように描かれているのだろう。

その扉には「階長」と印刷されていた。それを「カイチョウ」と読むのだと思った。扉を開いた青年に案内されて入った部屋は広く、反対側の遠い壁に嵌め込まれたテレビに何か映っているのかも判別できなかった。こちら側の壁のテレビには、朝と同じようにピントの合っていない緑色の葉が映っていた。今はそれがありふれた葉ではなく、森の木の幹に形作られていた模様だということが判った。部屋の中央に置かれたテーブルは石でできていて、天然の渦巻く模様が綺麗に磨かれている。店主と並んで椅子に座ると天井に描かれている天使の絵画がテーブルの表面に反射し、そこに直接描かれているように見えた。

階長に挨拶をしたいのだともう一度言うと、入り口で案内をしてくれた青年が、自分こそがその階長だと自己紹介した。それは店主も知らなかったのに違いない。

「ようこそいらっしゃいました。私が伺わなくてはならないのに」

そう言うと、案内をした店主のことも労った。ようやく事情を知っている人物に出会えた

のだと思いきや尋ねることにした。

「ここは何ですか。私は何故ここにいるのでしょうか」

性急な質問に階長は微笑みながら答えた。

「勿論、それをお知りになりたいのはよくわかります。どこからお話したものか」

すこし間を置いてから階長は続けた。

「この建物は通称メゾンと呼ばれています。ご主人はあなたにお話ししていなかったようですね。賢明です」

階長はそう言って改めて店主を見た。店主は明らかに緊張していて短くはいと答えるだけだ。階長に認められたことが嬉しくて堪らないのか、唇の端が今にも笑い始めそうに痙攣していた。階長は続けた。

「非常に人気のある施設です。入居希望者は多く、入居できるかどうかは抽選で決まるのですが、その抽選の倍率は信じられない程高いのです。あなたの入居が知らされたのは昨夜遅くでした。最後の入居者があったのは随分以前でしたから、私はとても驚きました。眠っていたのを起こされて驚いたということもあります。でも、入居の知らせはいつもそんな風に行われるのです。奇跡の知らせはそのようであるべきだと、上の人達は考えているのかもしれない」

「上の人達」という言葉を階長が口にした時、店主が意外そうに目を見開いたことに気づいた。階長の言葉を注意深く聞いていれば、意外な秘密も手に入れられるかもしれない。階長は自分の言った言葉にあまり注意を払うことなく、話を続けた。

「急な決定だったので今の住居は仮住いです。いずれ正式な住居について案内が来るでしょう。必要な物があれば、私かご主人に言ってください」

店主は勿論だというように頷いた。そして、私が地図を欲しがっていると階長に伝えた。階長はさっき新しいのが届いたところですよと言ひ、上衣の内ポケットから小さく畳んだ紙を取り出し渡してくれた。

「これを使ってください」

紙を三度開くとそれが建物のフロアマップだと分かった。地図の上の方に「一階ほ七射九八三」と書かれていたので一階の一部分の地図のようだった。各住居には数字と名前が書いてあった。階長はその一つを指差しここがあなたの住居ですよと言った。

「あなたはヘリマです」

そこには「減間」と印刷されていた。

「私は減間という名前ではありませんよ」

そう抗議すると、店主はあわててとりなそうとしたが、階長は冷静に答えた。

「メゾンでは住居の移動は頻繁にあります。その度に地図を変更し印刷し直せばその費用はメゾンの維持にかかる費用の数倍にもなるのです。だから、入居者は地図に印刷された名前

で呼ばれます。それに、そんなに簡単に名前が変わったら、近隣の住民が混乱すると思いませんか。ヘリマさん」

質問のように聞こえたが階長は答えを待っているのではなかった。話題を変えるため違う質問をした。

「建物の外の地図はないのでしょうか」

階長は楽しそうに微笑み答えた。

「勿論です。地図はそれだけです。でも、他の人にそんな質問はしないことです。ここだけの話にしましょう」

それには店主も頷いた。

もう一つ教えてくださいと言い、ポケットから切符を取り出して見せた。階長はほほうと言うと、自分の服の胸につけている名札を指差して言った。

「私の切符はこれです」

店主がこれも銀色だと驚くと、階長は満足したようだった。

「これは住民の証のようなものです。失くさないことです」

分かりましたと言い、もう一つ尋ねることにした。

「駅はどこにあるのでしょうか」

階長はとても楽しそうに話し始めた。

「素晴らしい。あなたの質問はどれも正確で適切だ。しかも論理の連鎖が途切れず続いている。これからが楽しみです」

「ああ、駅でしたね。正直なところ、駅がどこにあるのか私も良くは知りません。前の階長から聞いた話では、メゾンの最上階が駅になっているのだそうです。森のせいで上の階がどうなっているのか、ここからでは分かりませんから、駅は森の中にあるとか、海にあるという噂もありますよ。想像を禁じることなど不可能だということが、よくわかります」

「それでも住民は駅に行くことはありません。確かにこの切符を使えばその駅から元いた町に行けるでしょう。だとしたら、誰もそんな列車に乗るわけがありませんからね」

期待した程階長が事情を知っているわけではないと判ったのもう質問はなかった。帰ろうと席を立つと、天井に頭が当たった。部屋の向かい側の壁に嵌め込まれたテレビも、階長のすぐ後にまで近づいていて、そこに映っている森の木の幹に形作られていた模様がくっきりと見えた。ニュースは昼の時間を告げた。

「お昼のニュースです。一五五〇七号室のヘリマヘリマさんが入居されました。ようこそ。ヘリマさんは朝の間に森を抜け階長との面談も終わったばかりです。銀色の切符がとてもステキな方です」

ニュースの間、木の模様の映像は録画映像に切り替わっていた。最初は男がベッドで目覚

める場面。切り替わると男は森の中に入って行き、次の場面では入ったのと同じ場所から帰って来た。そして、階長の質問に真剣に答える男を階長の背後のカメラが捉えていた。この男がヘリマらしいのだが、見たことのない人物だった。

「『あんなに大きい人だとは思っていませんでした。森に入って行くヘリマさんは木の上を跨いで行きましたよ』そうおっしゃるのは一〇五三二号室のタナカさんです。タナカさんも大きな方ですね。

『通路で挨拶をしました。以前住んでいた町の話をしてくれました。話の中身は話せませんがね』一七〇九八号室のウシタマさんは、ヘリマさんと随分お親しいようです」

これまで店主と階長以外誰にも会っていなかったが、映像のヘリマはウシタマと呼ばれている女にとっても熱心に話しかけていた。

「こんなことはなかった」

思わず呟くと、階長は私の背中を二度軽く叩き、私にだけ聞こえるように囁いた。

「管理部門を騙ればどんな罰を課せられても言い逃れることは不可能です」

階長の住居を辞し自分の住居に戻る途中、店主は何も言わなかった。フロアマップに赤く記されているのがエレベーターだと気づいたので、一人だけで入った。エレベーターは壊れていて壁のボタンは反応しなかった。

「緊急隊に連絡しておきます」

エレベーターから出てきた私に店主はそれだけを言い、一人で店へ帰って行った。住居はもうすぐだった。

ニュースに店主が全く出て来なかったから、機嫌をそこねたのかも知れない。また会おうとも言わなかった。

自分の住居に戻ってもヘリマに関するニュースはまだ続いていた。

「切符の色が銀だろうと金だろうと関係ないですよ。新しい入居者は大歓迎です」

画面の隅にはLIVEの文字が光り、馬の仮面の男が言った。カメラには何人もの人が次々と映されていった。

「目が覚めた時のヘリマの顔、可愛かったわ」

蜘蛛の仮面をつけた女の声は若かった。

「新人は入って欲しいけど、あいつのする質問は好きじゃないな」

ピエロが自分の知性をひけらかすように言う。必ずしも好意的な意見ばかりではないようだった。体中を包帯で巻いた誰かがカメラを掴んで自分に向けた。

「俺がヘリマだ」

それを聞いてその場にいた全員が大声で笑った。カメラが映した人達は同じ部屋にいるよ

うだがカメラのライトの光だけで映されているらしく背景は暗くてどこかは分からない。全員の顔と姿を映したあとでカメラは彼らの背後にある扉をアップにする。隣の部屋でテレビの音が聞こえ、彼らは急に声をひそめ足音を立てないように扉の前に集まる。隣の部屋のテレビの音が静かになると彼らは声を出さずに、さん、にい、いちと口の形だけでカウントダウンする。そして、前列の馬と蜘蛛が扉を開け、後のメンバーが続いて隣の部屋になだれ込む。カメラはその向こうの部屋にいる男の驚きの顔を捉えている。男は突然飛び込んで来た彼らに驚きながら、彼らとテレビの中の彼らとを交互に見比べていて、そのあわてふためいている様子もまたテレビに映し出されている。テレビの中の男はヘリマだったが、やはり見たことのない誰かだ。ヘリマを囲んで、動物の頭をした住民達が歌を歌い始めた。こんなふうな歌だった。

あなたはどこからこの家に来たのですか
森は温かくあなたを抱きしめ
入り口の鍵はかけられたことがない
疲れた者に安息と希望を
与えるために待ち侘びていたのです

メゾンにようこそ
ようこそいらっしゃいました
メゾンはあなたを待ち侘びていたのです

あなたはどこからこの家に来たのですか
名前はあるあなたのために準備され
地図をすべて拡げる必要もない
探していた者に発見と報告を
与えるために待ち侘びていたのです

メゾンにようこそ
ようこそいらっしゃいました
メゾンはあなたを待ち侘びていたのです

私の部屋には誰も飛び込んで来なかった。こんな無意味なテレビは見たことがなかつ

た。窓のない壁の外で森が風に葉を鳴らしていた。

しばらく前から目覚めていたが目は開けなかった。うつ伏せのまま真新しいシーツの肌触りとアイロンのにおいを味わった。最初、ホテルにいるものだと思っていたが、すぐにホテルに泊まった記憶のないことに気づいた。寝ぼけた感覚の中で迷い少し考えてから、昨日の騒ぎを思い出した。それが現実でなくテレビの中のことだったと思い出すまでに暫くかかった。喉の渇きに手を伸ばしてサイドテーブルの水の入ったグラスを取った。一口飲むと目が覚めた。ベッドの上に胡座をかいて部屋を見渡した。

枕の下から封筒がはみ出していた。誰かが密かに連絡を取ろうとし始める頃だ。手に取り、封を切ると中から出てきたカードには、数字が書かれていた。正式な住居の番号に違いなかった。事態は思ったよりも早く進んでいるようだと、思わずつぶやいた。

エレベーターに向う途中、店主に会った。店主は最初の愛想良さを取り戻していて、扉を室内であげるための装置だと言って小さな箱を渡してくれた。その店主の背後にはストレッチャーが続いていた。店主はストレッチャーを体で隠すようにしていたが、運ばれているのが階長だとすぐに気づいた。私がストレッチャーに近づくと店主は仕方が無いというように、隠すのをやめて体を横によけた。顔を近づけると階長はなにかを言った。弱っているのか声は聞こえなかった。上半身と一緒に腕までもがストレッチャーにきつく固定されていたので、本当は拘束されていたのかもしれない。店主は急ぎますからと言い、私と階長の間に体を割り込ませ自分もストレッチャーを押しながら先に進んでいった。

私の手の中に、銀色の切符が残されていた。階長が店主に気づかれぬように握らせたのだろう。確かめてからポケットの奥にそれを押し込んで、エレベーターへ急いだ。

エレベーターの扉は綺麗に整備されていた。本当に店主は連絡してくれたのだ。中に入ると明りは眩しく、何もしなくても扉は閉じた。カードに書かれている通りに操作をすると、エレベーターは動き始めた。階数の表示はなく、停止するまでに長い時間がかかった。エレベーターが止まってから、もう一度操作盤をいじってみたが、もう何の反応もなかった。扉が開き私は誰もいないフロアーに降りた。

2 隙間だらけの観察者

通路はどこまで歩いても終わりが無いように思えた。丁度五歩の間隔で壁に埋め込まれた

ディスプレイには目を閉じた女の顔が映っていて、ディスプレイの前を横切る時だけ女は目を開けてニュースを読み上げる。

「おはようございます。只今の」

「温度は二一・二度。お散歩には」

「よい時間です。一〇〇一七号室の」

「キジマヒョウソウさんは」

「八〇〇〇〇ピースのパズルを」

画面の女の口を手のひらで隠すと声は聞こえなくなった。声と共に女もディスプレイも消え自分の住居の扉だけが残った。

部屋に入ると壁に立てかけられていたハシゴが体の上に倒れてきて、私を歓迎した。一時間ほどの外出の間に、部屋の中にはハシゴが繁殖していた。ほとんどのハシゴの下の端はすでに床と癒着していて、床からハシゴが生えているように見える。私の上に倒れてきたのはまだしっかりと根付いていない数脚だった。体の上のハシゴを払いのけながらあたりを見ると、床に穴が開いてそこから伸びているハシゴも少なくない。同じように壁や天井にも穴が開いていて、ハシゴの先端がそこに消えているものもあった。

木で作られたハシゴはよく見ると継ぎ目に僅かのズレもなく、誰かに、ハシゴの木というものがあり小さな頃はハシゴとは少しも似ていないが成長に連れて自然とハシゴの形に育つのだと言われれば、それを信じただろう。実は種もハシゴの形をしているのだと言われれば、それでもおそらく疑うことはなかっただろう。ハシゴに見とれていると木槌の音が聞こえた。ハシゴとハシゴのわずかな隙間に見える床を踏み隣の部屋に入ると、そこには一人の男がしゃがんで働いていた。振り向いた男の顔は口から下半分が髭で覆われ、残りの半分は深い皺が刻まれていたので、その表情は読み取れなかった。男は甲高い声で「うるさかったか」と聞いた。

近づくと男は自分を親方だと紹介しポケットから書類を取り出して見せた。

「以上のように、貴殿の住居はこの階の『ハシゴの交点』となりました。そのため、この部屋の室内全域に一八〇〇段のハシゴの建設を行います」

書類の最後の部分にはそう書いてあった。それから男は、親方といっても弟子はないのだと言い、照れたように微笑んだように見えた。

「今、何段までできたのですか」

そう尋ねると、親方は一二八段だなどと、答えた。

「いつ完成するのですか」

親方は半年かなと、答えた。

「あのベッドの真ん中にも二本作る。それは最後にするから、それまで十分に眠っとくんな」

そうも言った。目の前に立った親方の頭は私の腰のあたりまでしかなく、こちらを見上げながら拳を振り回してそう言った。

「脳肺炎と診断された一〇三〇一室のイビキコドクさんは、自宅療養中です。高熱が続いています。お隣の皆さんはお静かにお願いします」

ベッドに横たわると、ハシゴが壁床天井から突き出し、部屋の中の至るところで交差し絡み合いねじれているのがはっきり見えた。このままでは外に出る隙間がなくなるのではないかと思えた。

「ハシゴは使ってもいいのですか」

そう尋ねてみたが、親方は仕事に夢中で何も答えなかった。

返事がないのでベッドに横たわったまま手を伸ばし、頭上のハシゴを掴むと登り始めた。他のハシゴと絡み合っていないハシゴを選んだので、登るのは簡単だった。ハシゴの先端は天井の穴の中に消えていて、ハシゴ伝いに天井の中に登って行った。頭が穴の中に入る瞬間、それまで登っているとばかり思っていたが実は逆さまに降りているのかも知れないという考えが浮かんだ。天井裏には部屋の光が届かないのか、とても暗かったからそう思ったのだろう。

天井の暗闇を抜ければ上の階に出るだろうと期待していたのだが、闇を抜けた目の前には再び親方の背中があった。振り返った親方の顔は髭面でシワがより表情は判らなかったが、甲高い声で驚いたように「使ったのか」と叫んだ。親方はすぐに何処かに連絡をとり、電話口の指示に従って私の腕や背中を叩き、そこから身体中に拡がる波紋を手帳に書き写していた。それから急に顔を裏返したので、顔の裏の血管はあわてて眼球の奥へと移動し出てこなくなかった。そのせいだろうか、顔が元にもどされたときにはそれまで親方だと思っていた人は白衣を着た女に変わっていた。

女の背後に親方が仕事を続けている様子が見えたから、途中で代わったのだろう。

「体は大丈夫のようです。とはいえ、以前の状態についてのカルテがなく比較ができないので確かなことは分かりません。精密検査を受けていただけますか」

そう言われて女が医者であることが分かったので、一緒に検査室に行くことにした。ハシゴはすでに部屋の空間をほとんど埋め尽くしていたので、医者に手を引かれハシゴの隙間を通り抜けるために身体を深い角度で折り曲げたりねじったりして進まなくてはならなかった。玄関のドアの近くでは特に狭い隙間しかなかったので手をしっかりと繋いで迷わないようにしなくてはならなかった。

「10053号室のタナカさんが選手権大会への出場を決心されました。大会はもうすぐです。みなさん応援しましょう」

女医は右手人差し指の爪と左の眼球の一部と朝、排尿をする前の精液を採取すると、メゾ

ン各階へ送付するようにナースに指示した。ナース服を着ているのはウサギとネコにしか見えなかったが、人間ほどの大きさはあり、渡された試験管を咥えて奥の部屋に戻って行った。そして女医の問診が始まった。

「あなたは自分を何者だと思えますか」

「私は時間ではありません」

「あら、よく気がつきましたね。では、何故この階にいるのでしょうか」

「私の意思ではありません」

「すると、自分の行動を決定する他の誰かがいると、そう信じているわけですね」

「そんなことはありません。私は道をさがしています」

「まあ。素敵です。それはどこへの道ですか」

「どこへの道なのかもどこからの道なのかも分からなくなりました」

「すると、ここへの道を探していたのかも知れないわね」

この医者なら答えが得られるかも知れないと期待して尋ねてみた。

「ここはどこですか」

医者は机の上の「対症応答ガイドブック」を開き何かを探していたが、ようやく見つけたのかあるページに指を挟んだままで言った。

「ここは地下である」

私はといえば医者が言葉を探している間に彼女の背後にまわり、彼女が読んでいる頁をその場所から覗き見ていたので、そこにこう書いてあることを知っていた。

「『自分がどこにいるのか分からない』と尋ねるものが訪れた場合、彼もしくは彼女はあなたを試そうとしています。『ここは地下である』と答えて混乱させその間に緊急医療窓口に連絡しなさい。彼もしくは彼女とはそれ以上対話をしないようにすることが肝要です」

女医が机の下に手を伸ばし緊急ボタンを押す前に私はその手を取って指を本に挟み閉じた。閉じられた本の頁から泡の混じった赤い液体が溢れて流れ落ちた。

「なんと乱暴なことをするんだな」

甲高い声は部屋の反対側の床の下から聞こえた。その床に穴が空き、穴の中からハシゴの先端が現れ続いて親方の顔が見えてそう言った。

「医者を傷つけてはいけない」

親方はそう言うと穴から這い上がり、今登ってきたハシゴを引き上げると、そのハシゴを医者の上腹の上に立てた。白衣の上腹の中心に黒い穴が開いた。

「さあ、ここから逃げるぞ」

親方は私の手を掴むとハシゴにつかまり医者の上腹の中へと降り始めた。医者の上腹に開いた穴の側面では腸がうごめいていて、腸の内側では朝食べた鳥肉が青い野菜と共に形を崩し消化され続けているのが見えた。腸壁が透明になっていたのだろう。だが意外にも臭いは

まったくなかった。

医者 of 身体を抜けるとそこは別の部屋だった。

部屋は壁一面に隙間なく筒が立てかけられていた。コートを着た二人の若者が黄色と赤で塗り分けられた筒を運び入れているところだった。若者は親方と私に気づいて話しかけてきた。

「真っ赤な絵の具を探していたところです」

親方は二人と知り合いだったのだろう、私に紹介した。

「この二人は天体観測室の下っ端だ。なんでも言い付けていいぞ」

二人は笑みを浮かべおじぎをした。それから、親方は身体についているのは血液だと説明したが、二人は喜んで私の身体をタオルで拭い、力一杯絞ると流れ出る液体を絵の具瓶に詰めた。

「お二人は絵を描くのですか」

立てかけられている筒に描かれている様々な模様を見回しそう尋ねると、二人は声を合わせて答えた。

「いいえ。これは望遠鏡です。美しい望遠鏡が宇宙の真実に近づく唯一の方法なのです」

二人は顔も声も話し方もそれに身振りすら同じなので、目で見えていなければ一人だと思っただろう。

「ご覧になりますか」

勿論と答えると、二人はさっそく部屋中の筒を繋ぎ部屋よりも長い望遠鏡を作り始めた。部屋に収まり切らない分は親方が天井にハシゴの穴を開け、望遠鏡の先端をくぐらせた。

「ほらほら見てください」

そう言われて接眼鏡を覗くと、この階の階長が洗面所で髭を手入れしているところが見えた。望遠鏡の対物レンズは鏡の中にあるらしく、階長は真っ直ぐにこちらを見つめ返していた。

「これが木星です。太陽系では二番目に大きい星になります。あまりにも大きいのでこれが天体だということに長い間誰も気づきませんでした」

二人の説明を分かったというようにうなずいてから、二人が手渡してくれた天界報告書を読んだ。報告書には天体の名前は書かれていなかった。階長の日記と間違えて渡したのだろう。そこには階長の毎日の生活が記録されているだけだ。

「階長には愛人が六人もいるのですね」

目に入った部分のことを口にする、二人は残念そうに答える。

「そのことを知っているのは」

親方が二人の口を手で塞がなければ、階長はすぐに失脚していただろう。私はすぐに話題をかえようと、もう一つの質問をした。

「他に天体はないのですか」

「いいえ。他にも五百あまりの星が知られています。でも、その望遠鏡では見えません。私たちのような若い観測係には木星の観察しか許されないのです。でも、親方はもう何十年も経験があるので望遠鏡よりもっと確かな観測技術を持っていますね」

そう言われて親方ははにかみながらまあなと言った。

それからもう一度望遠鏡を覗いた。額に驚の刺青をした階長の顔が目の前に迫っていた。歯磨きの手を止めて、じっとこちらを覗き返しているようだった。望遠鏡の向こう側で、観測者の存在を知ることができるのだろうか。そう思ったとたん階長は手の中の歯ブラシをこちらに向かって投げつけた。歯ブラシは対物レンズで縮小されると筒の中を真っ直ぐに通過し、接眼レンズで元の半分の大きさに還元され、それと同時に私の右目に刺さった。激痛に私は気を失った。

「早朝のバス事故でバスの中に閉じ込められた一〇二九〇号室のケミハラさんは、緊急隊D一五九の決死の活動により先ほど救出されました。連絡から救出まで六分二秒。新記録更新中です」

ニュースの声に目覚めると、そこは自分の住居の扉の前だった。右目に刺さった歯ブラシはなくなっていた。視力も失われてはいなかった。住居の中は既にハシゴで隙間なく埋められ、指一本さえ中に入れられなかった。住居に入れなくなった私のために、親方は毛布を持ってきてくれた。天体観測係の二人は小さい携帯用の望遠鏡を貸してくれた。

「これはこの住居の内部に焦点を固定しているので、部屋の中に忘れ物があればそれで探すことができます」

誇らしそうに声を合わせて二人は言った。確かに望遠鏡の中で、ベッドの枕の下に忘れてきた室内用の凧が元の大きさの三倍程に拡大され今にもベッドから滑り落ちそうになって見えた。接眼レンズから垂れてきた凧糸を引くと凧は引き寄せられ部屋の中に浮かび上がった。しかし、部屋の中を埋め尽くすハシゴに遮られ、凧を部屋の中から取り戻すことはできなかった。望遠鏡の倍率を上げれば凧は大きくなり住居よりも巨大になって見えたのだが建物は壊れることがなかったし、あいかわらず凧は取り戻せなかった。

通路で生活するようになっていつも視界の端に何か棒のようなものの影が見えていた。正体を確かめようとすると、視線の移動に合わせて影も移動するので、それが何の影なのかは確かめられなかった。おそらく歯ブラシが目の奥に入り込んでいたのだろう。やがて影は消えたがそのかわり首筋にしこりができ、首を思うように曲げられなくなった。それでずっと通路の天井ばかりを見上げる生活が続いたのだが、天井に貼り付けられた書類に気づくまでずいぶんと時間がかかった。天井の照明が薄暗くなっていたのだろう。天井の書類は移動

命令書だった。発見が遅れたせいで出発の時間は迫っていた。エレベーターには一人で行った。親方と天体観測系の二人は姿を見せなかった。行く先はずっと上の階のように思えた。

3 海の法則

扉に刻印された文字に切符をかざすとドアは開いた。案内はなく、中に入っても明かりはうす暗いままだった。ドアから奥へ続く廊下の突き当たりに少女は立っていた。白い半袖のブラウスに薄い赤色のミニスカート。陽にあたっていないこの建物の住人の例にもれず露出した肌は白い。近づくとうれしそうな表情になるがその場所からは動かない。

少女の前を通過して右奥の部屋に入ると、部屋の暗闇の中で一つだけ小さな光が輝き、机とその上の機械を照らしていた。機械油の臭いが空気に混じっている。机の向こう側には両目に巻貝のような形をした眼鏡のようなものを付けた男の顔が浮かんでいた。男は機械の操作に夢中で侵入者には気づいていない。

機械は何のための装置かは分からないが、あちこちの塗装が剥げていて古いものだと判る。機械の中心に拳ほどの大きさのガラスの球体が固定されていた。男は目に付けた巻貝の眼鏡を機械に接触しそうなほど近づけ、頭上から下がっている操作腕をくねらせ球体の内側の何かを操作していた。それはとても小さいものなのだろう。入り口の位置からははっきりと見えなかった。男の目を覆った巻貝は光を分解するのか、七色に輝いて見える。

室内に入り作業台の近くに立ち仕事を眺めていたが男は私に少しも気づかなかった。部屋の中には砂浜に打ち寄せる波の音がずっと聞こえ、知らない間に眠ってしまいそうだ。機械油の臭いだとばかり思っていたのは海の生臭いにおいかもしれない。やがて、入り口にいた少女が飲み物を運んできた。それをありがとうと言って受け取る。

作業が一段落すると、機械工は体の向きを変え言葉を待っているようだった。

「時計が動かなくなりました」

そう言って自分の腕時計を渡した。機械工は文字盤を覗き込み裏返し時計の裏に書かれた仕様を読み、耳に当て状態を確認して言った。

「これはもう使い物にならんね。歯車が腐食している。秒針も一本折れているな」

「直せないものでしょうか」

「ここには時計修理用の歯車がないし、万一直せても二度と正確な時間は分からないだろうね。ここではいつもニュースが現在の時刻を知らせているのだから、時計など必要ないだろう」

機械工はそう言って時計を放って返し、ガラス球の作業に戻った。私は部屋のどこかに時

計を治す薬品が隠してあるのではないかとあたりを見回したが、それらしいものは見当たらなかった。そして、機械工が作業をしているガラス球の中を見ると、はじめてそこに何があるのかに気づいた。

「海ですね」

機械工は振り返り頷いた。

「海を知っているのか」

「ここに来る前は海の近くに住んでいました」

「近くにいるのも何も知らないままということはある。本当に海を知っているのかどうか、もっと近くで見るといい」

機械工が席を立ち、いれかわりに椅子に座ると顔を球体に近づけた。よく見ると、球の中にあるのは水ではなくとても小さな歯車だった。透明な歯車と青い歯車が組み合わさっていて、歯車が回転するとそれは海水の流れにしか見えなかったし、歯車の歯の擦れ合う音は波のさざめきと区別することができなかった。部屋の中に流れていた潮騒の音は歯車の間で生まれた波の音が球の表面で拡大され聞こえていたのだと気づいた。

歯車の動きに夢中になって球体に顔を近づけると、機械工は肩をつかんで引き離れた。

「あまり近づくと溺れるぞ」

機械工の忠告は少し遅かったようだ。喉の奥には止まらない波が生まれすでに息ができなくなっていた。ただ溺れてはいても体は動いたし、息をしなくても支障はなかったので、これが本当に溺れているということなのだろうかと思った。それでもすでに、声にはすこしだけ泡が混じっていた。

「体の中°に°海°°ができた°ようです°しばらくここで°海を教°て°ください°」

体内の海が完成するまでという約束で、機械工の元で海を学ぶことにした。その部屋を出て体内の海が海であり続けるのかも不安だった。私は作業室の床の上で眠った。少女がときどき食事を運んでくれた。海の波は数日でできたが、波の音を作るのにはさらに二週間かかった。それができるようになると、機械工がどこかから手に入れてきた魚をその中に放ち、これが生き続けられなければだめだと言った。魚が生き続けられるようになると、機械工は次は魚達が息をつくための島を作るように命じた。そのようにして私は機械工の部屋に住み続けた。

「君はここに住んでいるのですか」

そう尋ねても少女は何も答えなかった。姿が見えないときにはどの部屋を探しても少女は見つからなかった。どこかよその部屋から来ているのかもしれないが少女が外からやって来

るところを見たことはなかった。海を作りはしなかったのが機械工の弟子ではないのだろう。住居に食事を作る部屋はなかったの、どこかで作られた食事を運んでいるだけだったのかもしれない。廊下に立っているときの少女はいつも目を閉じていて、声をかけても返事はしなかった。何かを待っていたのかもしれない。目を開くと微笑んでくれたが、それが私を見て微笑んだのかどうかは最後までわからなかった。

島が完成すると次は潮の満ち干きを作るように命じられた。機械工の作ったガラス球の中で海は確かに一日に何度か満ち干きをしている。

「ひとつひとつの歯車の歯の数はあらかじめ違わせてある。だから、回転がその数の公約数や公倍数にぴたりと合うとき、海は満ち干きをするのだよ」

確かに計算してみれば機械工の言葉が真実であることは分かったが、真実を理解するのは難しい。

満ち干きができないままずいぶんと長い時間が過ぎた。

「すばらしいわ。新しい技術を学ぶことは常に私たちの可能性を広げてくれますからね」

階長が私の肩越しにガラス球の海を見てそう言った。この階の階長が女性であることや、どっしりとした腰とたっぶりの乳房は、テレビで幾度も見て知っていた。スーツの上着が身にぴったりしすぎているので締め付けられた乳房は服の中から飛び出しそうだ。

「そんなにこの胸に興味があるの」

階長は私の視線に気づいてそう言った。

「あまり露骨な好奇心は減点になりますからね」

そう言ったが階長は本気ではないようで、私の頬を両手でやさしく包んで、作業中の海に向けなおした。すると、それまでどうやっても起きなかった満ち潮が発生していた。海からあふれる海水がガラス球から流れ出し、作業台の上を濡らしている。

「タオルを」

そう叫ぶと隣の部屋から少女がタオルを持って駆け込んできた。しかしタオルでは足りなくて、機械工と共に大きめの水槽を倉庫から運び込み、ガラス球をその中に置いた。海水はまだあふれ続けていたがそれ以上部屋を水浸しにすることはなくなった。

突然生まれた満潮の理由を考えると、階長は少女を丹念に観察してから尋ねた。

「この娘は今まで会ったことがないわ。紹介して下さらない」

「この家にはじめから住んでいた娘です。ご存知ないとは不思議です」

機械工がそう答えると階長は急に不機嫌になりこう詰め寄った。

「この階の住人について、私はすべて把握しているの。こんな娘がこの階にいるなんてありえないわ。いったいどういうことなの」

階長の剣幕に少女はおびえてうつむいてしまった。階長が大声で言い募り続けるので、私は服の内ポケットから、昔、最初の階長からもらった切符を取り出して、それが少女の身分証明だと説明した。切符を手にして丹念に検分した階長は、切符と少女をかわるがわる見てから言った。

「まあ。そんなことがありうるの。でも」

階長は混乱していたようだったが、最後にこう言って切符を少女に返し、帰っていった。「いいでしょう。でも、そうだとすると、あなたはこの階にはいられないはずよ。移動命令書がきているかどうか確かめなくては」

階長が帰っても、少女の体は震え、白い体は透き通るほど青ざめてしまった。少女の体に手をまわし、軽く抱き寄せながら水槽の中を見ると、満潮はすでに終わり、干潮が始まりかけている。

「満潮の原因は階長でしょうか」

機械工は少女を抱く私の様子が気にかかるようだったが、その質問には答えてくれた。「君の海は階長によって満ち干きがおきるようだな。君の海が階長を引き寄せたという可能性も高い」

階長の姿は見えなくなったが、階長がこの階のどこかを移動するのに合わせて、それからも海はゆっくりと満ち引きを繰り返した。ときどき機械工がそれを眺めて、メモを取っていたが何をしようとしているのかを説明することはなかった。

相変わらず少女はどこからか現われどこかに消えていった。機械工と同じように、満ち干きについてのメモを取ることが法則を発見するための第一歩だったのである。私の記録したメモが床の上に積み上げられ、それが体の上に三度崩れ落ちたあとで、少女と機械工の海の満ち干きとの関係に気づいた。目の前に落ちて開いたままの頁に「これだ」という書き込みから矢印が引かれ、その先に機械工が両手で支えるガラス球の周りをまわる少女の絵が描かれていた。チュチュを着た少女は全身を硬直させながら自分自身も回転している。「これだ」の文字は私の筆跡であり、絵には私のサインも添えられていたが、そんなことを書いた記憶はなかった。

水槽の中でガラス球が大量の海水を吐き続けた朝、再び階長は訪れた。

「あの娘はどこ」

階長に問い詰められても機械工の海は干潮の時間だった。

答えに困っていると、階長はあたりを見回し床に積み上げられたメモを手に取り順番に読み始めた。メモをすべて読み終えるのには一分もかからなかった。

「これは預かるわ。いずれあなたにも話を聞かせてもらうわ」

階長は大量のメモを台車に積んで運び出した。最後に、メモの代わりとでもいうように壁に移動命令書を貼った。移動命令書は少女の次の移動先を明記していた。これだけ明確に書かれているのでは誰も命令から逃れることなど出来ないだろうと思った。

やがて戻ってきた機械工は、命令書を見ると壁からはがして破ろうとしたが、その紙は破るどころか壁から剥がすことも皺をつけることさえ出来なかった。やがてあきらめた機械工は命令書の前の床に膝をつき、彼女は他の階では生きられないのだと呟いた。確かに計算してみれば機械工の言葉が真実であることは分かったが、真実を理解するのは難しい。

「命令書を破り捨てても移動命令は撤回されないでしょう。でも、移動命令書がこれほど強靱に作られているとは知りませんでした」

見当はずれな言葉に、機械工は何も答えようとしなかった。

紺色にオレンジの縦縞の入った制服を着た警備員に機械工は抵抗できないよう羽交い締めになれ、少女は不安そうな表情を浮かべたまま肩を小突かれてエレベーターにたどり着いた。階長は言葉を発することなく、身振りだけで警備員を行動させた。私は少女からあの切符を返してもらえないものかと思い幾度も近づこうとしたが、警備員には少しも隙がなかった。

エレベーターの扉が開き、警備員の手で少女は中に押し込まれた。今にも泣き出しそうな顔を見せている少女に、階長はにっこりと笑いかけバイバイと明るく言うと手のひらをひらめかせた。警備員の一人がエレベーターを操作し少女だけを中に残し閉まりかかるドアをすり抜けて通路に出た。

扉が閉まってもしばらく動き始める物音はしなかった。中から扉を叩く音がした。階長は眉を寄せ扉を睨みつける。警備員が確かめようと前に進みでた時、何か硬いものを引きちぎる太く大きな音があたりに響いた。その場にいた全員が一瞬身を竦めたが、通路には何も起きなかった。警備員の注意がそれた隙に、機械工は腕をほどき扉に駆け寄った。機械工が辿り着く寸前に、エレベーターの扉の内側で留め具が千切れるような太い音が響き、エレベーターの動き始めたのが分かった。扉を内側から叩く音は思いのほか早い速度で下に落ちて行った。その後を追いかけるように空を切るケーブルの音が続いた。エレベーターはどこまでも落ちて行った。全員が耳を澄ましていたが、地面に激突したような音は聞こえなかった。

「さようなら」

階長の朗らかな挨拶。

機械工の海はもう満ち干きをすることがなく、機械工の指は海の波を作り直すことさえできなくなっていた。私は海をさらに三つ完成させてから、機械工の部屋を出て自分の部屋に戻った。

少女が壊したエレベーターの修理は江の二一五班が担当し、完成までに半年かかった。私に新しい移動命令書が届いたのは、修理が完了したその日だった。

4 本物の郵便配達は階段を使わない

「夜のニュースです」

いつもの声で目が覚めた。目をあけずシーツの上においをかいた。いつもと同じにおいだった。住居が移動になっても、これは変わらない。クリーニング窓口は各階にあるが、実際の洗濯はどこか一つの場所で行われているのだろうか。ただ、どこを探しても、それと同じにおいのする通路はなかった。窓口の担当者も覆面をつけ奇妙な声で話している。シーツは毎日使うものだから特に機密扱いされているということだろう。

「五二三〇七四号室のゲンゲンゴロウさんは現在、そこにはないものを探しています。もしもそこにはないものを見かけたらすぐにこちらまでご連絡を」

聞いたことのない名前だったが、聞いた事のある名前であっても、その人物が本当にここに住んでいるのかどうかはあやしい。そもそもニュースで言われたのと同じ名前の人物に会った事など一度もない。あれはきっと架空のメゾンでの話なのだろう。違う世界の話なのだ。そう思いながら目を開くと目の前に知らない男の顔があった。知らない顔だったが、緑色の制帽をかぶり同じ色の制服を着ているので配達員だということは分かった。私のベッドに上がり込んで、目が覚めるのを待っていたのだろう。

配達員は各階に一人いて、届けるものがあればどこにでもやってくる。受取人が眠っていれば、目覚めるまで待っている決まりだ。だが、受取人が目覚めたというのにそれに気づかないなどということはこれまで一度もなかった。目の前の配達員は私の顔を覗き込むように体を傾けて座っていたが、その目は閉じたままだった。何かに耳をすましているような表情を浮かべ、何かを話しているように唇がかすかに動いていたので眠っているのではないようだった。

「配達ですか」

そう尋ねると、聞き入っていた音楽からゆっくりと現実に戻ってくるかのように、配達員は目を開いた。目を開けても耳に残っている音楽を反芻しその幸福をまだ味わっているのか、ぼんやりとしたまま配達員はうなづいた。それからやはりゆっくりとした動作で床の上

に置いていたカバンから大きめの封筒を取り出して私に渡し、伝票を見せてサインを求めた。

「何か象徴となる記号としてのサインをください」

そんなことを言う配達員は初めてだった。名前は必要がないという意味なのだろうから、見た事のない特急の絵を描き始めた。描き終わるまでにずいぶんと時間がかかったが、配達員は何も言わずに待ち続けた。待っている間、やはり目を軽く閉じて何かの音楽に耳をすましているようだった。サインをした伝票を渡してから尋ねた。

「どんな音楽を聞いているのですか。さしさわりがなければ教えてください」

配達員は何を聞かれているのか分からない様子で、音楽ですかと聞き返した。確かに配達員は音楽を聞くための装置を身につけてはいなかった。

「目を閉じて聞いているのは何ですか」

こう聞き直すと配達員は私の意図が分かったというように頷いたが、規則で答えられないのだと、残念そうに言うだけで、教えてはくれなかった。伝票のサインをちらりと確認すると配達員は立ち上がり制服の皺を伸ばしカバンを肩にかついでから礼を言って部屋を出て行った。どんな扉でも配達員が触ればたちどころに開くのだと言われている。鍵がかかっているようにと釘で打ち付けられているように、必ず扉は開くのだとも言われていた。私の部屋の扉も例外ではないようだった。

封筒の裏にはずいぶん前に知り合った天体観測系の青年のサインが描かれていた。望遠鏡のどこかの部分の絵らしいのだが、どの部分なのかは分からない。その道の専門家は私の気づかないものをたくさん見ているということだろう。封筒の中には青い表紙のノートが一冊入っていた。見知らぬ文字で書かれていたので内容は理解できなかったが、文の間に挿し挟まれたたくさんの絵から、そこに書かれているのはこの建物の設計図とそこから繋がる鉄道の路線図についてのあれこれであるように見えた。

「階が変わればそこで使われる言葉はまったく違うので、何一つ意味が通じなくなる」

天体観測系の青年は別れるときにそう言っていたが、その後何度も移動した先で、言葉に不自由することはなかった。しかし、こうして彼から送られてきたノートを見ると、彼の言葉が正しかったのかもしれないと思えた。彼らは今、どこか遠い階に住んでいるのだろう。私はノートを縦に折り曲げると上着の内ポケットに隠して部屋を出た。

それから、この階の言語栽培師に貰った名刺をたよりに彼の住居に向かった。半日ほど歩くと隣り合う住居の扉の間隔は狭まり、扉の幅も細くなり続けた。その扉の内側の部屋は扉より狭く、住人は横になることもできないだろうと思えた。ときどき、扉が開き子供が通路に走り出して来た。子供は一人だけということはずがなく、何人もが次々と扉を抜けて出て来た。このあたりは子供専用の住居区画なのだろうかと思ったが、そんなものがあるはずはな

かった。

扉の間隔はさらに狭くなり、大人の体では通り抜けられそうもない幅の扉が隙間もなく並ぶようになった。名刺の住所はそこだった。呼び鈴を鳴らすと扉は開いたが、扉は腕が通るくらいの幅しかない。その隙間のむこうで顔見知りの言語栽培師のひげ面が、よく来たと挨拶をしているのが見えた。そして彼は扉から腕だけを出して私の腕をつかんだ。握手を求めているのだと思い握り返したら、おそろしい力でひっぱられた。扉にぶつかればただではすなまいと思ったが、扉は柔らかい素材でできていたようで、体がつつかえることもなく通り抜けられた。通り抜けると室内は意外に広い。言語栽培師は改めて挨拶をし、大きめのタオルを手渡してくれた。気がつくとも服も体も全身が水を浴びたように濡れていた。扉は海の中を通っているのかもしれない。

彼の栽培している言語用の六人の子供たちにおみやげのあめ玉を渡すと、さっそく彼にノート of 解説を依頼した。内ポケットのノートは少しも濡れていなかった。貴重な資料には特殊な紙が使われているということなのだろう。私は絵のない文字だけの頁を彼に見せ、何が書かれているのか分かるだろうかと尋ねた。栽培師は眼鏡をかけてまず、ノートの右上から左下までたんねんに調べた。

「知らない言語に出会ったらまず右上から読んでみることです」

言語学の学生に教えるようにそう言うと、今度は左上から試し始めた。

「栽培師は新しい言語を作ることには長けているのですが、そんなにいろんな言語を知っているわけではないのですよ」

ノートを様々な角度から読もうとした後で、彼は残念そうにそう説明した。

「この文字には見覚えがあるのです。しかし思い出せません。よければしばらくこのノートを貸してもらえませんか」

貸してしまえば言語栽培師はこれを自分の新しい言語として発表してしまうだろう。私は申し出を断ったが栽培師は一頁だけでもと食い下がった。私は言語栽培師や彼の言語を育てさせられている子供達が一文字も覚えてしまわない内に住居を出ようとした。

「では、言語学者を紹介しましょう」

言語栽培師は残念そうにそう言うと、知り合いだという言語学者の住居までの道順を教えてくださいました。入る時はあれ程狭かった扉が出る時は通路の幅よりも広がった。

五〇三七七七号室の扉を開けた言語学者は自分を言言語郎博士だと自己紹介し、部屋の中に案内してくれた。部屋の中は薄暗く、影の中には何かが潜んでいるように思えた。

「言語というものは、そのほとんどが意味からできています。そして、意味は光を嫌うものです」

光を重要視している学派なのは分かったが、その根拠までは想像もできなかった。部屋の

中のどの壁にも大きな窓があり、窓はすべてカーテンで隠されていた。窓のある部屋などメゾンに来て初めて見たが、窓の外にあの森が見えるのかどうかまでは確かめられなかった。

言言博士はノートを見ると右上から読み始めたが、一目で何が書かれているのかを見抜いたようだった。

「この言語はこの世界には存在するはずのない言語だ。君が私のところに来たのは正しい選択だった。こんな言語を研究しているのは私しかいないだろう」

博士は言語学者らしく独特の言葉遣いをするので、その発言の意味は良くわからなかった。それでもページをひとつお読み終えると、内容について説明をはじめた。

「建物の設計図にはいくつか間違いがあり、通路で迷子になったハシゴ職人が、設計図に合うように今も建物を修復している。しかし、設計図の通りになると特急が止まるには駅の長さが五メートル足りなくなるはずだ。長さの足りないプラットフォームからはみ出た車両を切り落とすための大きな鋏がどんな駅にも準備されている」

設計図のない頁を見せたのに、博士は設計図の間違いについて預言者のように話をした。

「そんなことが書いてあるのですか」

そうたずねると言語学者は嬉しそうにもう一度繰り返した。

「建物の設計図にはいくつか間違いがあり、通路で迷子になったハシゴ職人が、設計図に合うように今も建物を修復している。しかし、設計図の通りになると特急が止まるには駅の長さが五メートル足りなくなるはずだ」

最後の言葉をしばらく待っていたのだが、それ以上彼は話を続けなかった。鋏については話してはいけないことだったので、それを除いて言い直したということなのだろう。

「そんなことが書いてあるのですか」

ともう一度尋ねると博士は答えた。

「この言語では、書かれていることにはなんの意味もない。書かれていないことこそが、本当の主題だ。だからこそ、一文字も触れられていない建物の設計図であるとか、意図的に削除されているハシゴ職人について、こと細かく語っているといえるだろう。そもそもこんな文字は世界のどこにもないのだから、あるいは世界のすべてがここに書かれているのかもしれない」

言言博士は学生に説明するようにそう話すと、尊敬のまなざしで見られるのを待っているようだった。あいかわらずその言葉の意味はよくわからなかったが、このノートに書かれている文字は世界に存在しない文字だということらしい。私は幾分かの失望を感じ、帰ることにした。

ノートの意味を確かめるにはもう一度、天体観測係の青年に会うしかないのだろうと思った。彼らと別れてから移動命令を何度も受けていたので、彼らが下の階にいるのか上の階に

いるのかさえもう分からない。ノートが読めないということは、この階に住んではないということだ。私は帰り道の途中にあったエレベーターの前に立った。いつものようにエレベーターは故障しており、いくらボタンを押しても光ることはなかった。それから、すこし遠回りをして階段に向かった。いつもエレベーターが故障しているの、階段を利用する者は多い。だが、私が行くと階段はいつも立ち入り禁止の黄色いテープが貼られていて使うことはできなかった。そういう規則になっているようだ。今回もやはり階段の入り口には黄色のテープが幾重にも貼られ、テープの上に黒い文字で誰も入ってはいけないと書かれていた。

「通れませんね」

どうにかして入れないかとあたりを見ていると声をかけられた。振り向くとそれは緑の制帽と制服を着た配達員だった。ノートを届けた配達員のはずだ。

「いつもこうです」

そう訴えると、配達員は私にかわって黄色いテープに手をかけて、剥がそうとしてみたがテープはしっかりと貼り付けられていて剥がれはしなかった。

「建物のメンテナンスはいつも人手が足りないようです。これも仕方ありませんね」

配達員は建物の職員らしくそう言い訳をした。私は気になることをたずねた。

「配達員なら上へも下へも自由に行けるんじゃないんですか。階段など使わなくても」

すると配達員は帽子を目深にして、低い声で答えた。

「ああ。もちろんです。今日は。この階段で働いているはずの保守係に郵便を届けにきたのです。いないようですが」

配達員はあて先の人物についていつも正確な情報を受け取っているはずだから、その説明は奇妙だった。

「あなたは配達員ではありませんね」

そう指摘すると、配達員はあわてて走り去ろうとした。もしも配達員が偽者なら、重大な犯罪だ。私はすばやく動いて彼の腕を取り背中にねじりあげ動けないようにした。腕の痛みをあげ配達員は見逃してほしいと訴えた。

「わたしの変装を見抜くとは只者ではありませんね。正直に話しますから、見逃してください」

男の腕を拘束している力を注意深く少しすこし緩め、話を続けるのを待った。

「わたしは配達員が正しく行われているかどうかを調査している監察員です。配達員と同じ服装をして彼らを調査している者が、実は大勢いるのです。ご存知だと思いますが」

そんな馬鹿な話は聞いたことがなかったので、もう一度腕をしぼりあげた。痛みを叫びを上げたので、本当のことを話すように促した。今度は腕の力を緩めなかった。

「わかりました。もう、嘘はいけません。痛くしないでください。胸のポケットに入っている私の身分証明を見せてください。私が特急列車の運転手だということが分かるはずですよ」

特急列車の運転手がこのメゾンに住んでいるという噂は聞いたことがあったが、配達員の真似をしているとは知らなかった。空いたほうの手でポケットを探ると、確かに身分証明のような紙が手に触れた。しかし、それもまた偽りだったのだろう。彼は私がポケットの中身に気をとられた瞬間、私の手をふりほどいて走り出した。だが、私はそれを予想していたので後から足にとびつくと男を仰向けに倒し、胸の上に座り込んで逃げられないようにした。それから彼のカバンを逆さまにして中身を全部床にあけた。何か正体を明かすことのできるものが見つかるかと思ったのだ。たくさんの紙があたりに散らばった。大きさはまちまちで、そこにいろいろな書体で文字が書かれていた。

「砂時計が時間を測るのなら、砂こそが時間である」

「長さの足りないプラットフォームからはみ出た車両を切り落とすための大きな鋏がどんな駅にも準備されている」

「シーツを洗濯するためのクリーニング室は深い海底にあり海流が廻るにつれてシーツは増殖している」

「子供達を誘拐して、自分の楽しみのために働かせよう」

「部屋のテレビの裏の駅の改札口から電車に乗ると料金がただになる」

偽物の配達員の白状したところでは、これらは人々の思考のかけらであり、思片と呼ばれるものらしい。

「思片は心に浮かぶとすぐに消えてしまう。だがわしはその消える前の一瞬にその思片を捕まえ紙に貼付ける技術を発明した。紙に貼り付けておけば百年は消えずにいるからな」

偽配達員は見かけよりずいぶん歳をとっていたらしく、正体を明かした後はずっと横柄な口調に変わった。

「他にもあるのですか」

そう尋ねると偽配達員は言おうか言うまいか少しためらってから答えた。

「勿論だよ」

「気づいていないようですから言いますが、思片といえども人のものです。それをとったらそれは盗みです。管理部門に知られれば捕らえられ、メゾンから追放されるでしょう」

偽配達員は最初、その言葉を信じなかったが、メゾンを追放され森の中で行方不明になった窃盗犯の話を経つか聞かせると、やがて不安そうな表情になりどうすればいいのかと尋ねた。

偽配達員は見かけよりもずいぶん年をとっていたらしく制帽を脱ぐと髪の毛は一本もなかった。頭髪があると思片を盗みやすいから、盗まれないように髪の毛は全部剃ってしまったのだと言ったが、髪の毛がない方が思考は盗まれやすいのに決まっている。本当は自然に禿げてしまったのだろう。

「では思片を元の持ち主に返すことです。そうすれば、失くした思片を誰も探したりしないでしょう」

偽配達員は、必ずそうするから管理部門には内緒にしておいてくれと何度も言って、帰っていった。彼の姿が消えた後、私は事の次第を管理部門に連絡した。不正を放置しておくことは、それもまた不正というものだ。

通報した後、ノートをもう一度右の上の角から読んでみた。そこには見慣れた文字で当たり前のことが書かれていた。今まで何故それが読めなかったのかは分からなかったが、その文字はどれも自分で書いた文字のようだった。ノートの裏表紙には、ほかでもない私の名前が書いてあって、建物の設計図と建物の最上階の駅を通る鉄道の路線図の次の頁には、上階にあると言われている港の噂話がいくつも書かれていた。港のある部屋は入り口が濡れている魚の鱗のようなものが床に落ちていたりとか、クジラの鳴き声が聞こえる住居に港があるだとか、船と一緒に嵐が訪れた場合には決して扉を開けてはいけないだとか。

どれも自分の書いたものだと思い出した。最後の頁には次の移動命令書が挟まっていて、それだけが私の文字ではなかった。

6 やさしい言葉の育て方

階長に招かれて彼の住居に向かうとすでに何人かの客がいた。ドアの前に立つ私を認めて階長が近づいてきて、言葉を交わすこともなく席に案内された。そこここに置かれたテーブルに食べ物と飲み物が並べられ、客は自由にそれを皿に取り食べていた。静かだったのは誰も話していないからだだった。この階は最上階に近く、下の階とは違って壁のテレビは一つもない。

(階長) [時間が分からないかわりに、静寂を得られる]

階長と初めて話をしたとき、彼はそう書いていた。

(階長) [私は生まれつき声を失っているのです、筆談で失礼する]

階長は初めて会ったとき、そう書いた筆談ボードを胸の前に掲げ、試すようなまなざしで挨拶をした。そんなふうと言われると声を出して会話することが何か失礼に思えて、私も筆談ボードを使うようになった。メゾンに来てからというもの文字を書く習慣がなかったから、はじめの頃は書いた文字の形がなかなか定まらず、筆談ではうまく考えを伝えられなかったが、やがて素早く書いてもたいていの人に通じるようになった。

招かれた客は私を除いて七名いた。全員が同じように痩せて背が高く、灰色のスーツを着

ていて、注意をしていないと皆同じ人かと間違えてしまう。全員がこの階の住人で、階長と同じように筆談ボードをいつも手元から離さない。全員が声を失っているわけではないのだろう。彼らの書く文字はどれも判読しがたく、書く事に慣れていないのは明らかだった。

しばらくすると階長が立ち上がり、これから品評会を始めると宣言した。そういえば、招待状には何かの品評会をすると書かれていたことを思い出した。招待状の白い紙の中心に「ことばの品評会」という文字だけがオレンジ色に輝くインクで書かれていた。そのときは詩か何かの発表会だろうと想像し、退屈だろうなと思ったことを思い出した。客が誰も声を使わないのは、本番の詩の朗読のために声を蓄えているのかもしれない。それから、奥の部屋に控えていた子供達が、それぞれの客に呼ばれて入って来た。という事はこれは子供たちの発表会に違いない。退屈な時間になりそうだった。全員が揃うと、階長は最初の発表者を指名した。

紹介された男は帽子を被っているところだけが他の客と違っていた。帽子は頭髮が少しもない事を隠すためなのだろう。それは帽子の端から髪が一本もはみ出していない事から伺えた。男は連れて来た二人の少女を前に立たせた。子供はそれぞれのポケットから白い布を取り出した。そして、別のポケットから取り出した三本の細い針を布に刺し、同じ調子でくると動かして、布の続きを編み始めた。手芸の発表会かと思ったが、糸で布を編むところを見るのは初めてだったので、それほど退屈はしなかった。やがて片方の少女が相手の今編んだばかりの部分に指を触れ、微笑むと自分の布を少し編み、相手に触れさせた。相手の方はすぐに声をあげずに笑って、また少し編み相手に触れさせる。こんなふうに二人は布を編み続けた。やがて帽子をかぶった男が再び前に現れた。

(帽子)[これが今年の言語です]

階長が他の客たちに質問はあるかと尋ねた。最初に筆談ボードを高く掲げた男は、太い唇であるところだけが他の客と違っていた。

(太唇)[特徴は?]

(帽子)[この言語は、語彙も文法もありません。三本の針によって立体的に編み合わされた糸の状態が意味を表します。だからどんな複雑な概念でも表現できるのです。言語表現は布として残りますし、この階のよい特産品となるでしょう]

階長が他の質問をと促すと、糸はどこまで細くできるのかとか、針の素材の強度について尋ねられた。専門外の私には意味のないことばかりだ。この二人の少女は生まれつき盲目であり、他に適切な言語媒体が存在しなかったから、編み物を言語にまで発展させたのだとも帽子は書いていた。八年かかったと書いていたが、何に八年かけたのかは誰も尋ねなかった。

質問が途切れると階長は編み物言語の発表の終わりを宣言し、次の発表者を指名した。

次は白い髪を短く刈り長い耳を持つところだけが他の客と違う男だった。少しも似てはいなかったが私は兎を思い出した。右目が赤く濁っていて、口を閉じていても唇がめくられて大きな前歯が見えていたからかも知れない。

彼の連れて来た二人の子供は、お揃いの短いスカートを履き襟にフリルのついた白いブラウスを着ていた。子供は少し強ばった表情で観客を見ていたが、兎顔に言われて声を発し始めた。それはこの部屋で初めて聞く声になるはずだった。しかし、声は言葉には聞こえなかった。歯を擦り合わせ舌を鳴らして唾をすすり、それらの音が混ざり合っただけで、結局はただの雑音だった。その雑音にしか聞こえない声あるいは音を二人の子供たちは意味のあるもののように聞き理解していたのだろう、頷き合い、それからお互いの手を握って我々に向かって何かを語り始めた。勿論それが何を言いたいのかは少しも理解できなかったが、他の客や階長は微笑み、涙を流し、最後は拍手までしていた。

(私)[意味が分かるのですか]

隣に座っている階長に尋ねると、彼は意外そうに答えた。

(階長)[勿論です。ああ、資料をまだお渡ししていませんでした]

そう書くと階長は大きめの黄色い封筒を渡してくれた。封筒の中身は今日の発表の資料だった。資料によると、この子供たちの言語は海の波から生まれたのだという。子供たちの言葉が波の音だったと一度気づけばそれは確かに雑音などではなく、砂浜に寄せる波の音の他のどんな音にも聞こえなかった。

資料では、海から離れた場所では言葉の意味が分かりにくいのだが、海に近づくにつれてその意味は明瞭になるのだという。その注意書きには「海中では聞き手自体が意味となっている自分を発見する」とあった。

私はポケットからガラス球を取り出し、その上の端に空いた口から砂の形の歯車を幾つか中に注いで即席の海を作った。すると、子供たちの発していた音は黄色の子豚が飛び跳ねて屋根から転げ落ち、古い古い栈橋を壊してしまうという詞であることが明らかになった。それでも子供たちの歌はやはり波の音であり、詞の中の「子豚」や「栈橋」も少し赤みを帯びた波の一つに過ぎなかった。「文法は常に変化し続け、同じ文法が使われることは二度とありません」資料の説明は正確だった。子供たちの歌が終わると、再び立ち上がり前に現れた兎顔は体中が白い体毛で薄く覆われ、もはや兎にしか見えなかった。

質疑応答の時間には、その波が最初に出現した海の正確な緯度と軽度が明かされ、客たちは一斉に筆談ボードを手のひらで叩いて興奮を表した。それは正にこの建物のこの部屋を示していて、それこそメゾンがかつて海だったという古くからの言い伝えを証明しているのだという。

次の発表者は、鼻が途中から右に曲がっているところだけが他の客と違う男だった。暖かい地方の半袖シャツを着て半ズボンを履いた二人の子供を、彼は連れてきていた。細い腕や脚は色が白く、向こう側がうっすらと透けて見えた。子供たちは小さな声で挨拶をした。

「はじめまして。みなさんにお会いできてすごく嬉しいです」

それから生まれて初めてもらったプレゼントがムラサキオオトカゲの子供で、それがどれだけ嬉しかったかを話しはじめた。その話が一分も続いたとき、客が揃って筆談ボードをテーブルや床に打ち付け抗議の音を立てはじめた。階長はいったんそれをやめさせると、尋ねた。

(階長)[これは何だ]

(鼻曲)[これは言語です]

(階長)[これは我々が今使っている言語とどう違うのかな]

(鼻曲)[何も違います]

(階長)[では失格だ]

そう宣告されても鼻曲りは食い下がった。

(鼻曲)[しかし考えてみてください。九年の間、この子たちは何も無いところから言語を生み出し、それが我々の言語と]

(鼻曲)[語彙も文法も寸分の違いなく同じなのです。これは奇跡ですよ。失格だなんて考えられません]

(階長)[規則を忘れたのか。すでに存在した言語はどのような理由があろうとも評価されない]

(階長)[奇跡かもしれないが、不正があったのかも知れない]

(階長)[君もそんなことは分かっているだろう]

不正と言われて不満そうな顔になった鼻曲りは反論しようと筆談ボードに何かを書き始めたが、書き終えることなく他の客たちに腕を捉えられ自由を奪われて部屋の外に連れ出された。

(階長)[規則を破ったものは追放されなくてはなりません]

するともう鼻曲りはこの階にはいなくなったのだろう。階長は何もなかったかのように、次の発表者を指名した。

次は、顔の半分ほどある大きな口をしていることだけが他の客と違う男だった。口は閉じることができないらしく唾液が滴れ続け、くさい口臭が最前列の私のところまで届いた。男の連れて来たのは背の高い少女だった。

(大口)[この子には昔話を朗読してもらいます]

そう促された少女はしばらくは何も言わなかった。五分ほど沈黙が続いたあと、開いた口

からは言葉とは思えない奇妙な音が一瞬発せられた。それは海の言葉のように穏やかなところがなく、ずっと続いていたらうるさくてたまらなかつただろう。声が消えた後、耳に残った反響にはいろいろな音が混じっていて、気分が悪くなった。これが言語だと言うのだろうか。何をどう伝えているというのだろうか。資料を読むとこの言語では言葉は順番に語られるのではなく、すべてが一瞬に伝達される。意味の構造は音の構造に忠実に変換されており、逐次的な伝達におけるような曖昧さはまったく存在せず、それゆえにこの言語には偽りや誤解は存在し得ないと書かれていた。確かに優れた言語のようだったが、聞き取るには長い訓練が必要だろう。質疑応答では、まず音楽との違いがどこにあるのかが問われた。大口がしぶしぶ認めたところでは、この言語では時間という概念を表現し伝えることができない。それが音楽との違いだと言う。資料には書かれていない事実だった。その答を聞いて、私を含め大半の客たちは興味をなくした。時間を伝えられなければ、存在というものを完全には理解できない。その後、おぞな質問が幾つか続いて次の発表に移った。

次は唇が太いことだけが他の客と違う男だった。もしも話ができたとしても、唇が重すぎて口を自由に開閉できそうには見えなかった。彼が連れて来た子供は二人とも太っていて、やや小さ目の服の袖は腕に食い込み前のボタンは一つを残してすべてなくなっていた。

男の説明では、この言語は食用なのだという。一方の子供がもう片方の子供に話しかけると、話しかけられた子供はうまそうにその言葉を真似して口を動かす。それが食べることになるのだという。食べ終わると舌なめずりをし、今度は自分が話しかけ、相手はその言葉をむさぼる。なるほど、聞く事が食べることなら、これほど太っていてもおかしくはない。(太唇)[人は食べずにはいられない生物です。だから、このように食用になる言語であれば、ずっと使われ続けるでしょう]

観客は全員、大きく頷いていた。質疑では語彙それぞれの味や、カロリーについての質問が多かった。太唇はミネラルを多く含むのは文法のほうなのだと強調していた。これは有力だと階長が資料にメモを書いているのが横から見えた。

次は、口を開くと前歯の抜けているところだけが他の客と違う男だった。息をするたびに歯の間を通過する空気が低く静かな音をたてた。小さな音だったので、最前列に座っている私以外には聞こえなかつただろう。男の連れて来た子供は、はっきりと見えなかった。確かにそこに存在することは疑いようがないのだが、どんな顔をしているのか、どんな服を着ているのか、具体的な特徴がよくわからない。それが実は横になったままの老人なのだ打ち明けられれば、それに違いないと思っただろう。

その子供たちの言語は、私たちの耳に入ると音を消し去り、文字が目に入ると目から光が消滅したので、言葉がそこに存在することを確かめることさえできなかつた。確かに、そのせ

いでそのように知られないでいようとする何かが存在するのだということははっきりと分かったが、それで何かが明らかになるということもなかった。

(歯抜)[これが読まれる事を拒み、聞かれることを拒絶する言語です。使われ飽きられ忘れられることで言語が消滅してゆくのなら]

(歯抜)[この言語はそんな消滅の道から最も遠い存在です。この言語ならずと存在し続けることができるでしょう]

この主張には反対する者が多かった。

(太唇)[例えそうだとしても、これはもはや言語ではない。何も伝えられずどんな意味も表さないものを果たして言語と呼べるだろうか]

これまでの発表と比べても、質疑の時間は長く、テーブルの上の食べ物があらかた消えてしまうまで議論は続いた。とはいえ、これといった結論はでないまま質疑応答の時間は終わった。

これが最後の発表だったので、その後、今日発表されたすべての言語について再び議論が行われた。私には分からない学術用語や聞いた事もない言語が引き合いに出され、話し合いは永遠に終わらないのではないかと思えた。しかしやがて筆談ボードを掲げるものが誰もいなくなると、階長は投票の準備を始めた。今日の発表から一つの言語を選ぶのだった。私も投票に参加するようにと、階長に勧められた。

一名の失格者を除き、その場にいた八名が投票した。結果はこのようになった。

編み物言語 ○○○
海の波言語 ○
全体言語 ○
食用言語 ○○
拒否する言語 ○
普通の言語 失格

私は食用言語に投票した。一人発表していない男は眼鏡をかけ、口髭を生やしていることだけが他の客と違う男だった。投票結果を三度確認した後、最も多くの票を集めた編み物言語以外の子供たちは、台所に連れて行かれた。台所では黒い作業服を着た二人の男が子供を抱き上げ、ダストシュートの中へ逆さまに放り込んだ。太った二人は暴れて落ちまいとしたが、一旦頭が投入口に入ってしまうと、後はどうあがこうとも逃れられず、結局は穴の奥に落ちていった。

部屋に残された盲目の姉妹は、その間も編み物を続けていた。お祝いの食事が運び込まれテーブルの上に並べられた。アルコールのグラスも並べられ、階長が自由に飲んでほしいと書いた。階長と発表していない男は他の客をねぎらい、それぞれのグラスにアルコールを注いだ。この階に来てから初めてアルコールを口にしたので、少し酔いすぎていたのかもしれない。私は横に座っている階長にこう尋ねた。

(私)[いろいろな言語があるのですね。今日は驚きました。評価されない言語を作った子供たちがゴミとして捨てられることに心を痛めています。もしもそれを話したり書いたりする「人」というものを必要としない言語があれば、子供たちが不幸な目にあうこともないでしょう。そんな言語ははたして存在するのでしょうか]

(階長)[それは面白い考えです。まあ、あの子供たちはあれで結構幸せなのですがね。で、もしもそういう言語がいたとすると、あなたはそれがどんなふうだと思いますか]

階長はそっけなくそう書くと、答えも待たずに私から離れていった。

この品評会というものがどんな目的で開かれているのかを私は誰にも聞かなかった。聞けば、そんなことも知らずにやってきたのかと、全員に咎められたらろう。話題がなくなり、ふと、編み物をしている二人の娘に話しかけても、何も答えは返って来なかった。

[あなたは初めての方ですね。話しかけても無駄です。この子達は編み物以外の言葉を知りませんから]

頭にまったく髪のない男がそう書いた筆談ボードを向けてきた。いつのまにか帽子を脱いでいたらしい。投票に勝ち、興奮して頬を赤くしていた。

(禿)[他の言葉を知ってしまったら、新しい言葉は生まれません]

初めて参加した私に何かを教えようとしていたようだった。ここでは誰もが他人に教えるを垂れようとする。禿頭はしばらく講義を続け、それに飽きるとまた他の人達の方に移動した。

やがて、階長が筆談ボードに大きな文字で[おわり]と書き、お祝いがお開きになると客たちはそれぞれ帰り支度を始めた。酔いが回っていたのだろう、その頃になると私は他の人が筆談ボードに書いている文字がさっぱり読めなくなってしまっていた。今まで分かっていた文字が何の意味も伝えなくなり、文字の形は意味のない落書きに変わってしまったようだった。皆、酔いのせいでまともに文字を書けなくなっていたのだろう。もしかすると、酔いで文字が崩れていたのではなく、もともと彼らの書く文字が文字ではなかったのかもしれないと思う程、私もひどく酔っていた。

会長の住居を出ると、眼鏡をかけた口髭の男が近づいて来た。品評会で彼は何も発表しな

かった。しばらく一緒に歩いた。発表された言語について通路で話をしてはならないと念を押されていたので、話題は何もなかった。やがて、男が筆談ボードに何かを書いて手渡した。

[話したり書いたりする「人」というものを必要としない言語のことは、誰から聞いたのですか]

階長との雑談を盗み見ていたのだろう。

[そんな馬鹿な言語は存在するはずがありません]

注意深く返事を書いたのだが、男は私の腕を強く掴み、筆談ボードを私の目の前に突きつけた。

[隠すことは文法において無駄です]

男は言語監察員のような文で私を脅そうとしていた。腕を掴んでいる力は振り払うことも不可能で、そのまま誰も通らない通路に引き摺りこまれてしまった。壁に体を押し付けられた。近づけてきた顔の眼鏡越しに見つめる目は全く震えていなかった。怖ろしくなって事実を答えた。

[ふと思いついただけなんです]

男は口髭を歪ませて目をそらした。苦笑したのだろう。

[それでは、あなたは自分でそんな言語を栽培していたと言うのですね]

反論する時間は与えられなかった。男は壁のダストシュートの蓋を素早く開けて、その小さな穴に私の頭を押し込んだ。体が通るはずのない程の小さな穴だったのに、頭が入ってしまうと、残りの体は小さな投入口を何の抵抗もなく通り抜けた。落下する間、途中で何かに引っかかるだろうと期待していたのに、どこまでも落ち続けた。落ちて行きながら、移動命令書もなく階を移動するなど許されるのだろうかということだけを心配していた。

5. 重力と色彩の比率

幾度かの移動命令の後、私は自分がどの階にいるのか分からなくなっていた。上の階に行くにつれて空気が薄くなり物音が遠くなるのだとか、メゾンの気密は完全なのでそんな馬鹿なことはあるわけがないとか、上の階では物の重さが半分以下になるのであわてて飛び上がると頭をそこここにぶつけてひどい怪我をするのだとか、その怪我の治癒には低い階での何倍もの時間を必要とするとか、いろいろな噂は聞いた。しかし、噂の真偽を確かめられるほど上階にいるわけではないらしく、エレベーターから降りるたび気をつけてみても、何の変化も感じられなかった。

それでも店の棚には高度計が置かれていて、手に取る客や買ってゆく客を見かけることも少なくない。最初の頃、一度だけ私も買って見たが高度計とは名ばかりで、ボール紙製の小箱

に高度計と下手くそな字で書かれていて、中央の数字も手書きなのでどこへ行っても高度を示す数値は変わらない。説明書には「この階でだけ使用してください」と書かれているから、確かにそれでも機能は果たしているのだろう。

そのときは高度計が初めて発り出された直後ということもあり、店には高度計を買うための長い列ができていて、入荷してもすぐに売り切れてしまうのだと店主が嬉しそうに話していた。私の前にいた青年は、自分の買った高度計を見て四八一だと興奮していたし、早くから列に並び最初にそれを手に入れた子供たちは店の外に座り込んで早速高度計の数値を確かめ、値の大小で喜んだりくやしがあったりしていた。私の買った高度計の数字は七五五だった。単位は明記されておらず、その数字の表す高度が低いのか高いのか、建物でいえば何階に当たるのかも分からない。同じ階でありながら高度が違っているのはどういう訳なのだと店主に尋ねると、自分は売っているだけで技術的なことはさっぱりわからないのだと言う。そう答えながら店主は手のひらに隠し持ったメモを盗み見していた。このような質問があることを予想し、回答はあらかじめ用意されていたようだ。

高度計の棚の隣にはハシゴが並べられていた。ハシゴは値段が高いので、ハシゴの上半分だけとか下半分だけを切ったものが半額以下で売られていた。高度計と一緒に買うとさらに値引きしてくれる。高度計を買った青年が、ハシゴに登ったときと降りたときの高度差を高度計で比べるには、ハシゴの半分もあれば十分だと言い訳をするように声に出して言いながら、上半分を買った。そんなに優れた考えに周りでは誰も理解していないのだから、自分は誰よりも頭がいいのだと思い込んだような薄ら笑いを浮かべている。だが、青年の胸の名札はオレンジ色だったから、そんな明らかな事実気づかないほど無知なわけではない。奇妙に思っただけで私は青年の後をつけた。

青年は店を出ると店と隣の住居の間の狭く入り組んだ作業路に入って行った。進むにつれ通路には一つも扉がなくなり、すれ違う人もまばらになって行った。地図で確かめてもそんな通路は載ってのっていないので、鉛筆で書き加えながら後をつけた。通路は狭く、もしまると一本のハシゴを買っていたら最初の曲がり角で進むことも戻ることもできなくなっていただろう。勿論、上半分とはいえ幅はほとんど通路一杯で、反対側からハシゴの半分を持って別の誰かが来れば、二つのハシゴが絡まり動けなくなるはずだ。あたりの光が弱く、通路も通路の中にあるものも、私を含めてすべてが灰色に見えた。何度か角を曲がりやがて立ち止まると、青年は壁に目立たなく作られている扉を開けて中に入った。数字の書かれていない扉を見たのはそのときが初めてだった。

道に迷ったふりをしてその扉の中に入った私は、青年を見失っていた。扉のすぐ内側にあの上半分だけのハシゴが立てかけられていたので、そのハシゴを降りて行ったのだろう。私もハシゴに足をかけ、後を追った。ハシゴを掴み段に右足をかけ、地面の下のそこにあるはず

の次の段へ左足を下ろすと、足は確かに床の下で見えない段を踏んだ。見えなかったが足の感触だけを頼りに次々と段を降りてゆくと、そこは別の通路だった。それが下の階なのかどうかは確かめようもなかったが、ハシゴの上半分がもともと繋がっていたハシゴの下半分へと伝って降りたのだろう。その通路は元いた通路と同じように灰色で、気をつけなければ別の場所にいるのだということのを忘れそうになる。息苦しくて大きく息をついた。灰色の空気を呼吸していても体に影響はないのだろうか。青年の姿は見えなかったが、足音がひとつだけ遠ざかって行くので、その音を追いかけた。

肉や野菜の腐ったにおいが強くなった。そこは食堂だった。裏口から入っても誰にも咎められなかった。厨房の湯気の間から大きな包丁を振り回す料理人たちが見えた。彼らは動物の内臓や切り離された鳥の首に熱中したり野菜をどれだけ細かく裁断するかに工夫をこらしていたので、私を見ても何もいわなかった。厨房を抜けて店の中に入ると、肉や野菜の腐ったにおいはさらに強くなり、こんな場所で食事などできるとは思えなかった。それでも客はテーブルとテーブルの間に隙間なく列を作り、自分の順番を待っていた。案内係に、厨房から来たのだと言うとすぐに席に案内された。並んでいた客は顔をしかめて鼻を鳴らし「ずるい」「ずるい」と怒鳴ったが、案内係に目をつけられれば食事ができないということは理解しているようで、案内係が睨むとすぐに大人しくなった。

席に着いて注文を叫んだ。食堂の中を鳥の乾いた肉の料理の名前が反響した。幸運にもあの青年が隣に座っていた。壁に向かって一人で麺をすすり、目の前に置いた高度計を見つめて、その数値の意味を汲み取ろうとしているようだった。私は顔を近づけ「汁がとびますよ」と言って、テーブルにあった布巾で高度計を拭いた。「湿った高度計では正確な高度は測れません」とも忠告した。すでに数字は汁で滲んでいて、奇数か偶数かも判らなかった。「触るな」と青年は言って箱を取り返し、再び高度計の数字を夢中で見つめ始めた。「お節介かもしれませんが、いくら因数分解を繰り返しても機械の仕組みはわかりませんよ」と言うと、ようやく青年は私の言葉に注意を払うようになった。

「そもそもこの高度が奇数なのか偶数なのかも判らないのです。あなたは数字に詳しくそうですね」

そう言って高度計を私に見せた。既に乾きかけた数字は六七五にも四〇一にも見えた。彼の高度計は四六一ではなかったのだろうか。

「素数のようにも、素数でないようにも見えます」

「そうなんです。宿敵数や累積数やまして鏡面数ではありませんし、さらにあり得ない事ですが八三五より大きな数字が世界から消えてしまったのかとも考えました。そして、そうなるのであればそもそも数ではないのかもしれないと気づいたのです」

「素晴らしい洞察です。でも、食べながら話すのはやめてください」

青年の口に吸い込まれたくないと暴れ続ける麺から跳んだ汁がまた高度計の数字を濡ら

した。麺の汁の中に数字を変質させる成分が含まれているのだろう。青年は慌てて麺を飲み込んだが、既に数字は二七三や一一三に見える何かに変わってしまっていた。

私は自分の高度計を確かめるため、食堂を出て通路の先で誰にも見られないように体で隠しながら高度計を取り出した。

「あなたもそれを買ったんですね」

あたりに誰もいないはずだったが、背後に忍び寄っていた青年は私の手の中を覗き込みながらそう言った。

「これは手作りなんです。ほら。数字は手書きだし、第一ボール紙を箱の形に組み立てただけで中は空っぽなのです」

あの店の列で青年の後ろにいたことだけは知られたくなかった。青年は笑いをこらえるように喉をならした。

「偽物を掴まされましたね。手書きの数字では正確な高度など測定しようがありませんよ。しかも、中が空だとは」

青年の言葉は不愉快だったが、何も言わずもう一度彼の高度計を改めさせてもらった。私の高度計と並べると、確かにその材質も数字の正確さも比較できないほど洗練されていて、自分が本当にまがい物を買わされたのだと分かった。

「高度計だけが人生じゃありません」

失望が表情にでていたのだろう、青年はポケットから取り出した小さな本を開き、そこにある言葉を読み上げて元気づけてくれた。

「しかし、高度を知らずに最上階に向かうことができるわけがないでしょう」

そう私が言っても、青年は本物の高度計を持っている自信をほのめかせ答えた。

「最上階に何があるんですか」

「駅があるでしょう」

「駅ねえ」

「切符があるんです」

「切符ねえ」

青年はからかうようにそう言うと、自分の胸ポケットからプラスチックの小さな券を取り出して見せてくれた。それは緑色で表面が濡れていたもので、気をつけなければ指を滑らせてしまいそうだった。

「地下鉄の切符ですか」

目的地や値段は既に掠れて読めなかったが、太い文字で真ん中に地下鉄と書いてあった。「他に高速バスや船の定期便もあります。空港が何処かがあると信じている人も少なくないのです。最上階だけが特別ではありませんよ」

はたして青年を信じていいものかどうか分からなかった。もし言う通りなら、彼は何故、高

度計を買う必要があったのだろうか。

「あなたは混乱分子ですね」

私の指摘は正しかったのだろう、青年は微笑みを浮かべ緑色の切符と高度計を私の手からやや乱暴に取り返すと食堂と反対の方向に早足で歩き去った。地下鉄は幾つもの路線が交差し一度乗り間違えれば、目的の駅に行けないばかりか元の駅に戻ることもできなくなる。それは列車に乗ってからだけでなく、乗る駅の改札口を選ぶときから注意しなくてはならない。特に遠い駅への旅では最初に正しい改札口の選択を誤ると一生を棒に振ることになる。青年の姿はすぐに見えなくなったので、私は青年が口からこぼし続けていた麺の汁の痕跡を追って地下鉄の駅を見つけようと考えた。

さっきまで人通りのなかった灰色の通路には、いつの間にか青い制服を着た清掃員が何人も働いていた。青い制服はどれも寸法が大き目で、体つきの細部を隠し、男か女かも判別できない。揃って大型の通路研磨機を押し、やかましいモーター音を響かせている。これでは青年の残した汁の跡はもう跡形も残っていないだろう。

「ハシゴを見かけませんでしたか」

元の通路に戻るためにハシゴの場所を清掃員に尋ねたが、彼らは何も答えなかった。正しい間を正しい時に正しい人物に尋ねなければ、答は得られない。何台もの通路研磨機が通路をふさぎ、一步進むのにさえ何時間もかかるようになった。機械の音がうるさくて、手のひらで耳をふさがなくてはならなくなった。

機械の間を抜けて最初の通路を曲がると、知らない間に機械に接触していたのだろう、左手の袖口が水色とピンクに染まり、尻の辺りは黄色と紫色の縞模様になっていた。通路研磨機がそんなに大きな音を立てるわけなどなかったのだ。機械の周囲には昆虫の触手のように無数の腕が伸び、その先端についた毛の短い刷毛はたっぷり絵の具を含んで、細かく振動している。それは通路研磨機などではなく空間彩色機だった。機械の通過した後、通路も壁も天井も灰色を失い黄色や緑色やオレンジ色に変わっていることに、もっと早く気づけば良かったのだ。

「ハシゴを見かけませんでしたか」

これが正しい間だった。正しい時かどうかは分からなかったが、正しい相手に質問したことは間違いなかった。

「この階にはもうハシゴは一本もないだろう。私たちはこの階のすべての通路を熟知している。この階にはハシゴはもう一本もないだろう」

空間彩色員は空間彩色機の上側の投入口に絵の具缶を傾け、黄色を補充しながらそう答えた。

このまま元の階に戻れなければ、私は行方不明者として記録されることになる。彼らがあ

の階をいくら探しても私は見つからない。私はそこにはいないからだ。

「ここはどこですか」

また答は得られなかった。もう通路には無数の色彩が満ちていて、通路の端に達し作業を終えた空間彩色員たちは、余った絵の具を立方体に固めて道端に積み上げ、空になった機械を素早く折りたたむと、腰を伸ばして帰って行く。一人だけ残り、作業の出来を確認している空間彩色員に尋ねた。

「私の住居を知りませんか」

幸運にもこれは正しい問だった。

「これが新しい住居です」

作業が終わったのだろう、それまで空間彩色員だった者は制服を脱ぎ始めた。背中のボタンは一人では外せないように、指が近づくと位置を変え逃げたので、私はボタンを外すのを手伝った。制服を脱ぐと、空間彩色員は髪が腰のあたりまである痩せた女だった。胸には金色の名札／切符をつけていたが、ゆっくりと確かめさせてはくれなかった。女は服のポケットから皺くちの紙を取り出し、私の顔の前に突き出した。紙には大きな文字で移動命令書であることが書かれていた。彼女が新しい階長だった。彼女の言うとおりに、そこが新しい住居だった。

7 落下する楽園

「おはようございます」

扉の前にいた店主はそうささやくように挨拶した。

通路の灯りは三つに一つしか点いていないので、店主の表情はよく見えなかった。上の階から若い女が転落して来たという話を聞き、見に行く約束をしていた。転落して来る者は少なくはないが、生きている者は稀だ。今回も、大勢が見物に行くだろう。

転落の起きる場所はエレベーターの前が多い。次いで階段の踊り場に落ちてくる者もかなりの数になる。しかし、それだけでなく、天井を突き破って通路に落下する者もいれば、ダストシュートから吐き出されて来る者もたまにいる。通路の天井に空いた穴は、衝立で誰からも見えないようにして修理される。そんな時のため、緊急隊には天井を専門に修理する部隊がいる。その紫色の制服は少年の憧れだ。ダストシュートの口は小さいので、そこから吐き出されるのは決まって子供だった。たまに、レスラーのように大きな大人が吐き出されることもあるが、彼らの知能は低く、実際は子供と変わらない。今度の女はエレベーターの前で倒れていたという。ありふれた転落だった。

薄いコートを着て通路に出ると、息が曇った。転落者にあてがわれる住居はいつも同じで、ここからなら歩いて一時間ほどで辿り着く。途中の通路には、紙くずや乾いた汚物や中には得体の知れない小動物の千切れた体の一部などが白い砂に半ば埋れている。青い制服の清掃員が働いているのを見かけるけれど、あまりにも動作がゆっくりしていて作業は進まず、通路のゴミは増えるばかりだ。このままではいずれこの階は古代の地層のように土に埋れてしまうだろう。通路のどこにいても、排泄物や得体の知れない何かの腐ったにおいがし、そのにおいは住居の中でも消えない。だから、ここに来た初めの頃は何も食べられなかった。絶えず頭痛になやまされ、何かを飲み込むことも苦しく、一旦喉を通過しても食べた物はすぐに戻した。勿論、やがて自分の膚に悪臭が染み込み、胃や肺から腐敗臭しか生まれなくなる頃には、何を食べるのも平気になってしまう。それだけではなく、その頃には悪臭だったにおいに空腹を感じるようにさえなっていた。自分はすでに命を失いながらそれに気づかず腐敗した肉体を蠢かすだけの存在になっているのではないかと、真剣に考え始めていた。

転落してきた女の住居に近づくと、うまそうなおいが漂ってきた。歓迎の宴が開かれているのだろう。それなのに話し声は聞こえない。目を伏せて私達が来た方向に歩いてゆく人達の砂を踏む足音だけがはっきりと聞こえた。彼らはすでに歓迎を終えて帰るところだった。ポケットを膨らませ、紙袋を抱えているのは、お祝いの品に違いない。私たちは足を早めて宴に向かった。

そのドアは開かれたままで、誰でも入ることができた。案内係はいなかったが住居の設計はどこも同じだから、迷いもせずに私たちはリビングに入った。そこには大きなテーブルがあるだけで肉の一切れも骨の欠片も残っておらず、テーブルにしたたり落ちた血さえ拭い去られていた。残っているご馳走のにおいが余計に空腹を思い出させた。

「調理室になら、まだ何か捨てられずに残っているでしょう」

店主は事情に通じている者のようにそう言って、奥の部屋に入った。

調理室も掃除が終わった後で、隅に置いた小さな椅子に調理係が座り居眠りをしていた。白い服には赤や青の汚れが残っていた。すでに仕事が終わったということだろう。店主は眠っている者の横に近づくと囁いた。

「何か残っていませんか」

調理係はよく眠っていたので、店主は同じ言葉を三回繰り返さなくてはならなかった。調理係はやがて目覚めるとうなづいて答えた。

「あなた達を待っていました。かれらは眼を残しました。右と左の両方です」

立ち上がりそれまで背中できりかかっていた天井まである大型の冷蔵庫の扉を開くと、大きな皿を取り出した。元の部屋に運び、テーブルの中央に置いてから、調理係はどうぞお召し上がりくださいと言った。皿の中心に二つの灰色の球体があり、それが眼球だった。血やリンパ液は拭われ、すでに調理は終わっていた。虹彩は室内灯の光を屈折させ眼球の上に小さな虹を浮かべていた。眼球は銀色の糸の束を蝶結びにしたものの上に置かれていたので、転がったりしない。調理係は、これは自分の仕事ではないのだが係が帰ってしまったからと言いつつをしながら、眼球を店主と私の小さな皿に取り分けてくれた。舌の付け根から唾液が溢れ出し、テーブルの上に染みを作った。それは店主も同じで、調理係は苦笑を隠すのに苦労していた。

小皿の上の眼球にはどこかしら見覚えがあった。

「この目は、私の友人でしょうか」

調理係は、それには答えられないと言った。店主は見覚えがないと言った。店で買い物をしない住民はいないから、店主に見覚えがないのなら知り合いではないのだろう。眼球が動かないようにフォークの歯で上から押さえ、ナイフで二つに割った。中までしっかりと火が通っている眼球は、潰れたりせずに二つの半球になって皿の上で回転した。それは人体図鑑で見た眼球の断面図そのものだった。水晶体は水色、動脈は赤く、静脈は青。眼球の内部には透明なゼリーが詰められている。どうやって調理したのかと尋ねても、調理係は教えてはくれなかった。

蝶結びにされていたのは神経だった。フォークとナイフで解くと、何処かを傷つけてしまったらしく、眼球が目をしめた。

「慎重に」

調理係はそう言うと、どこからか取り出したピックを半球に突き立てたので、眼はもう反応しなくなった。

「活がいい」

店主は感心したように言った。自分の分はもう平らげてしまったのだ。私はナイフの背に半球を乗せると、見せびらかすようにゆっくりと口に運んだ。調理係の足下に、何かの滴り落ちる音がした。店主は私と同じように大きな口を開けた。唇の端から、銀色の神経が一本だけ垂れていた。

眼球自体にはほとんど味がない。味付けは調理係の腕の見せ所だ。今日の味付けにはチョコレートと深海魚の鱗を使っていた。生臭くて、舌に痺れが残る。半分で満腹したけれど、残りの半分を誰かに取られないようにフォークでテーブルの下に弾き飛ばした。店主は物欲しそうにテーブルの下を覗き込んだが、追いかけてはしない。調理係は知らない顔をしていた。

「あまり苦しまなかったようですね」

そう尋ねると、調理係は思い出しながら答えた。

「ここだけの話ですが、最上階のさらに上から落ちてきたようです。そんな場所で仕事をしていたのなら落下に恐怖は感じなかったでしょう。ただ転落の時に首が折れていたらしくて、まったく動けませんでした。おそらく、痛みも感じなかったはずです。思いのほか柔らかかったのではありませんか」

『恐怖は肉を硬くする』

どこの調理場にも、そう書いた額縁が飾ってある。私はすこし頷いてみせた。

食事が終わると席を立ち、出口に向かった。

「新しい住人が、幸運を見出しますように」

扉の外に出ると、室内に立つ調理係に向かってそう言う決まりだった。店主も声を合わせてそう挨拶した。

「新鮮でしたね。目が良くなった気がします。味付けも斬新でした。あのチョコレートはきつと届いたばかりですよ。弾力が違った。あの鱗は、残した方が良かったんですか。割って食べたけど、いつまでも溶けなかった」

満腹した店主は思いついたことを次々と話し続けた。話に夢中だったからか、店主は何度も躓いて倒れそうになった。手を繋いでいても、すぐに足を取られて倒れそうになった。通路に積もっている砂の色が灰色に変わっていた。砂を踏むと水が染み出し、その水が少しづつ通路に溜まっていった。

「長靴を仕入れなくては」

店主はそんなことも言った。確かに、家路の半分も行かないうちに、水は足首が浸るほどになり、靴は重く水棲の動物のような鳴き声をあげた。これからは長靴が必要になるだろう。

「塩っぱいですね」

私は水に指を浸すと舐めてみてそう報告した。

「塩水道の管が破れたのかな」

店主には分からないようだったが、これは満ち潮だった。早く帰って海が壊れていないか確かめたかった。急げば急ぐほど、水に足を取られて先に進めず、疲れた足に力が入らなくなった。

海水は腰のあたりまで水位を増したが、流れは無かった。店主と私が前進すると、淀みが崩れて渦になった。通路に捨てられた小さな動物の背骨は水面に浮かび、生き返ったかのようには渦に乗ってくるくると回った。

海水が胸のあたりまで来ると、急げば急ぐほど体は水に浮かび、前進できない。通路に落ちていた乾燥した糞が水を吸い膨れて服の表面に貼りついて離れなくなる。ポケットの中には割れた貝殻が潜り込んでいる。このまま水位が上がれば、私たちは溺れ、ゴミのひとつになってしまうだろう。

やがて、肩のあたりまで水嵩が増え、波が口を塞いで息苦しくなってきた。体は冷たくなり指がしびれて動かなくなった。通路の天井の灯は鈍い錆色に変わった。私たちはこのまま水の中に沈んで二度と浮き上がることはないだろう。店主はすでに何も話さなくなり、汚れた水を何度も飲んで苦しんでいる。それでも手を繋いでいるので、見失うことはなかった。私たちが動くと水は揺れて、壁に当たり音を立てた。規則正しい水の音が通路の中に響いた。

初めは水が壁を打つ音と区別できなかったが、水の音の中から何かのきしる音が生まれた。それが水の打ちつける音とは違うとはっきりと気づいた時、私たちの目の前にその救命ボートが現れた。船体にはたくさんの傷があり、オールは左右の長さが違っていた。何もしなければ沈んでいたのだろうが、船底から湧き出す水を外に掻き出し続けてようやく船は浮かんでいた。ボートの漕ぎ手が私たちに気づいて、ボートを近くに寄せてきた。船体には木星と金星の絵が描かれていた。すでにペンキはほとんど剥げていて、目の前に来るまではそれを誰かの似顔絵だとばかり思っていた。漕ぎ手は船の上から、店主の腕を掴み引き摺りあげた。水を吸った服と尻が重く、店主の体はなかなかボートに上がらなかった。ボートからもう一つの腕が伸びてきて力を貸してくれた。店主の左足の靴が脱げて、水底に沈んで行った。私は店主の後から、ボートに引き上げられ、ようやく息ができた。ボートには二人の乗員と、私達だけしかいなかった。通路の天井が目の前に迫っていた。

小柄な方の乗員が店主の胸を何度も押さえた。その度にボートは大きく揺れた。やがて、店主は水を吐き始めた。押さえる力が強すぎたのだろう、吐き出した水は赤黒く濁っていて、その中に肺も混じっていた。肺は気管支のあたりで千切れて、口から零れ落ち、そのまま船底に溜まった。千切れなかったら、胃や腸までもがひきづり出され、店主は裏返しになっていたはずだ。肺を失った店主はそのかわりに意識を取り戻し、大丈夫だと言うように頷きながら体を起こした。何かを話そうと口を動かしても、声は聞こえなかった。店主は水底の肺に気づいていたはずだが何も言わなかった。

それから四人でオールを使い、水のない場所を目指した。天井が次第に低くなり、オールが水を掻く音は少しずつ甲高くなっていった。薄暗い水面を腹ばいになって漕ぎ続けると、やがて広い場所に出た。水中から現れた階段が上の方に続いていた。照明は今にも切れそうに

明滅を繰り返していたが消えてしまうことはなく、階段もボートもボートの乗組員も青色になって見えた。ボートを降り、三人で店長の体を引きずりながら階段の最初の踊り場まで登った。

「助かりました」

そう言っても、乗員たちは何も応えなかった。ただ背の高い方の乗員が私の前に来て、両方の親指と人差し指をかすかに蠢かすと私の顔を裏返して何かを探し始めた。体の具合を調べるには少し乱暴な気もしたが、痛みは感じなかった。探していたものはすぐに見つかったのだろう。もう一人を呼んで顔の裏のその場所を確認させると、ポケットから防水の封筒を取り出して、私に手渡した。

「これが新しい移動命令書です。この階段を登って行けば、夕食には間に合うでしょう」

その声には聞き覚えがあったが、誰だったのかは思い出せなかった。

移動命令書をポケットにしまい、一人で階段を登った。階段は急で、疲れ切った足は持ち上げるたびに痛んだ。十段ほど登り次の踊り場にたどり着くと、息を整えなければそれ以上進めないと思った。振り返り見下ろせば横たわったままこちらを見つめている店主の向こう側に二人が並んで立っていた。その場所からみると二人の男はまったく同じで、それまで何故少しも似ていないと思っていたのか分からない。二人は手を振っていたが、その手はどちらも右手で同じ形をし同じ周期で左右に揺れていて、音楽に使う何かの器具のように見えた。私も手を振って合図をした。それから再び階段を登り始めた。水面は遠ざかったはずだが水音はまだ聞こえていた。階段に当たりよだれを垂らして足跡を舐めているような音だった。今にも追いつかれそうなほど近くに聞こえた。足の痛みがひどくなり少しづつ足は動かなくなった。歩みがゆっくりになるに連れて水音はゆっくりになる。立ち止まれば階段に何一つ音はなくなる。それでようやく、階段が鍵盤になっていてそれを踏むたびにうまれる音が、後ろからついてくる水音だと気づいた。壁際の壁と階段のつなぎ目の柔らかい部分を踏んで進むようにすれば、水音はまったく消えてしまった。

それから階段を登り続けた。階段はどこまで登っても同じで、いつの間にか照明が青からオレンジ色に変わったことにも気づけなかった。突然、目の前に扉が現れた時には、ここに閉じ込められたのだと思った。移動命令書があればどこでも通れるはずだから、偽物だったと思った。そもそもエレベーターでなく階段を使って階を移動するなど聞いたことがない。命を助けてくれた者が、命を奪うような罠を仕掛けたのだろう。他人の運命を支配するとはそういうことなのだろう。そう思うともう動けなくなって、扉の前に座り込んだ。腹が空いていると気づいた。しばらくすると、扉の向こうに人の気配がした。何人もいるのが分かった。何人かが咳払いをし、少しだけ沈黙が続くと歌が始まった。

あなたはどこからここに来たのですか
森は永遠にその環を閉じているのに
あなたは新しい道を見つけたのでしょうか
あるいはこの家の生まれでしょうか

元いた町には誰も帰らない
黄金の切符を手にしたとしても
黄色の切符しか持たないとしても
あなたはどこを辿りここに来たのですか

ここに着いた時間を教えてください
ここで出会った人を教えてください
それだけがあなたの存在の標です

通路にはいつも灯りがつき
壁はいつでもニュースを教えてくれる
これ以上何を望むのでしょうか
メゾンはあなたのパラダイスです

移動命令書にはいくつ署名がありましたか
エレベーターはいつも故障しています
階段は常に閉ざされています
一階はもう海の底です

ここ着いた時間を教えてください
ここで出会った人を教えてください
それだけがあなたの存在の標です

住民はいつもおしゃべりで
ありもしないことをすべて教えてくれる
住民はいつも親切で
知りたくもないことをすべて教えてくれる
知りたいことは一言も話さずに

知るべきことはひとつも教えずに
足早にどこかに逃げ去ってゆく

メゾンでよく聞く歌とは少し違っていたから、何か事情に通じた者たちが歌っているのだろう。歌が終わってから、開けてくださいと声をかけた。

「この扉をあけてください」

三度呼びかけると誰かが気づいたようだった。ざわめきのあと、扉はやがて開かれた。明るい通路には緊急隊しかいなかった。緊急隊が歌を歌うわけなどないのだが、全員、頬を赤らめ目がうるんでいた。若い隊員はこちらを見ようとさえしなかった。緊急隊の隊長らしい背の高い女は私に近づかないようにしてしばらく様子を見ていた。危険がないと判断したのか、部下に命令し私のポケットを全部順番に裏返えさせた。ポケットからは、乾燥した動物の糞や、小さい骨、神経で編んだ糸がこぼれ落ちた。新しい何かが出てくるたびに、隊員達は期待にどよめき、出てきたものを見ては失望のため息をこぼす。しかし、ズボンのポケットの奥から防水封筒に入った移動命令書が発見されると、全員が歓声をあげた。その声は合唱の声と同じハーモニーを構成していたので、あの歌は間違いなく彼らが歌っていたのだろう。緊急隊の一人一人が、うれしそうに笑顔を浮かべていた。移動命令書を見つめ、移動命令書に恋をしているかのように、ただ笑顔を浮かべていた。

8. 葉の時間

移動命令が急だったので、まだ設備の調整が完全ではなかったのだと、緊急隊み四四七六の責任者は言った。不便を詫びたが、それが本心でないことは目を見れば分かった。自分のせいではないと思っているのだ。責任者ではなく、住民の苦情に対応するだけの担当者だったのかもしれない。話し始めると相槌を待ちもせず話し続けた。他の隊員達が仕事を終え、帰ってしまっても夢中になって話し続けていた。設備の不備と言っても備え付けのテレビの音声装置が故障しただけであり、生活に与える影響はほとんどないのです。それでも完全な生活を守るために緊急隊は存在しているのです。そう念を押すと、今回の修理で取り替えた部品は新型の真空管であり、真空管というものは深海に棲む蟹の体内でしか育たず完成までに三年を要する。それを収穫する仕事はまた大変なのであり、収穫隊という組織の存在なしにはそれは遂行し得ないだろう。自分の甥が収穫隊で働いているのだが、それはそのような理由で自分の誇りなのだ。さらに今回、真空管の交換をするために使用した器官交換ぬ四四七六は新型真空管の交換のためだけに設計されていて、勿論三年後には何の役にも立たなくなる。技術の進歩は事程左様に目覚しい。次第に早口になる言葉は、途中から三つの

音階を繰り返すだけになり、それもしばらくすると可聴周波数を超えて聞こえなくなった。一時間以上経って緊急隊の隊員が二人戻ってきて彼を連れ帰るまで彼は聞こえない言葉を話し続けていたが、彼らが来なければずっとそこに居続けたらう。

緊急隊み四四七六が去り、修理の首尾を確かめようとテレビのスイッチに指を触れたとき、鍵をかけていない扉を開けて白衣を着た男が現れ自分を医者だと紹介した。

「ガンセキ先生」

どの階でも医者はガンセキと呼ばれている。しかし、この医者はそう呼ばれると、私の目を一瞬見つめて、表情を変えなかった。医者は私と同じくらいの背丈で、メガネをかけている。それから、動物を運ぶために使うような黒い頑丈なカバンを床に置き、ポケットから取り出した切符を見せてくれたが、それは黄色だった。医者はみな黄色の切符を持っている。行先を確かめようと手を伸ばすと、医者は慌てて切符をポケットに戻した。医者は黄色の切符を誰にも触らせない。次の瞬間には伸ばしたままの私の腕を取りそのまま脈を数え始めた。医者の口ずさむ数は特別な数で、医者でない者にはその数体系を理解できないし、記憶することも不可能だ。

「その数が無限よりも遥かに大きな数だという噂は本当ですか」

そう尋ねると、医者は「シッ」と言い、聞き逃さないように脈に集中し続けた。

「脈は足音を盗まれることを嫌うので、声を出すとすぐに逃げ出してしまいます。一度逃げた脈をもう一度捉えることは経験のない医者には非常に難しい」

脈を数え終えた医者はそう言ったが「シッ」と言った非礼を詫びたのか、自分が経験豊かな医者であることを自慢したかったのか、どちらなのかは分からなかった。それから医者は両手を私の頭に添え、肉付きのいい親指で両方のこめかみをさすっていたかと思うと抗う暇もなく両方の臉を同時にめくり、人差し指を臉の裏側に潜らせた。指は眼球の表面を探り眼窩の凹凸を素早く確かめた。慣れた指づかいで探るので眼球に痛みはまったく感じなかった。目の前に映る指紋には生命線がくっきりと見えた。これから医師の救う生命の数だけ生命線は太くなっていくのだろう。その中には私の命も含まれているのだろうか。そう考えた時、指が臉の内側から引き抜かれたが生命線は見え続けた。臉の内側から指が急にいなくなってしまうさびしさのせいか、私の目からは黒いインクの涙が流れ落ちた。

「メランコリックなところがある」

医師はそう言いながらカルテに何かを書いていた。「メランコリックなところがある」と書いていたのだろう。

「携帯用のカルテです」

手のひらに収まるほどの紙の束を指でつまんでひらひらと振り、医師はそういった。何が書いてあるのか分からないように注意して振っていたので、何が書いてあるのかは分からな

かった。ただ私には卵から産まれた雛が成長し、飛び立つと同時に地面に空いた穴に転落してゆく絵が見えただけだった。それで、診察が終わったのだと分かった。

「自覚症状はないのですが、言葉が話せなくなっています。移動する階数があまりにも多いと、気圧のせいでしょう。駅が近づくからだと言われているかも知れませんが、それほど大勢が信じているわけではありません。勿論、そんなことがないように移動命令は慎重に計画されているのです。今回は、あまりに急だったからでしょうか、言葉が話せなくなっています。私の話していることはご理解いただいているようですから、すぐに治りますよ。心配は不要です」

医師はそう診断を下し絵葉書を何枚か処方してくれた。絵葉書には病名と症状が細かな文字で印刷されていて、おそらく発病の記念のために誰かに送るのだろう。しかし、よく調べると病名の文字の色使いがとても鮮やかだったので、それが珍しい病気についての絵葉書であり、自分のありふれた病気などその中にはないようにも思えた。それなら、私の発病の記念に送る絵葉書としてはふさわしくないだろうから、あるいは誰かを心配させたい時に送る絵葉書なのかもしれない。

医師は絵葉書と言ったがそこには絵ではなく病気の説明をした文字しか書かれていないのだから本来は字葉書と呼ぶべきで、そうすると普通の葉書との違いが明らかでなくなる。ただし、文字と言っても見たこともなく読めそうもない文字ばかりであり、絵と呼んでも一向に差し支えはないのだからやはり絵葉書と呼ぶべきかもしれない。つまり、医師の間ではこれを絵葉書と呼ぶことになっているのだろう。絵葉書を幾度も裏返して知った文字が一つもないことを理解する間に医師はお大事にも告げずに帰って行った。絵葉書をどんなふうに服用すればいいのかは一言も言わなかった。

医者がいなくなってから気づいたのだが、葉書にはすでに宛先が書かれ、貼られた切手には消印が三重に押されている。誰かの使用済み葉書では何の記念にもなりはしないだろう。その上、どの葉書にも宛先は三つ書かれていたので、受け取ったのが本当は誰なのかさえ分からない。宛先の中に「オオメダマ」という名前は一つもないから、医師が受け取った葉書は一枚もないということになる。そもそも、本当にそこに書かれた宛先に届けられたのかどうかも疑わしい。宛先の住所がどれも滲んで読めなくなっていて、宛先の住所の存在を確かめられない。柔らかい海の生き物の匂いのする滲みを舐めると微かに塩の味がした。地階に郵便物が届けられたという話は聞かないから、メゾンの外から配達されてきたものだろう。切手は見慣れた葉脈の図案だった。切手は光沢があり素材は紙ではないようだった。親指を軽く押し付けると、柔らかい布のような感触がした。そして、指を離すと親指に切手の絵が写っていた。指紋の溝の一本一本に図案の葉脈の一本一本がぴったりと一致してはまりこみ、こすっても少しも消えない。湿らせた布で指を拭いても模様は取れなかった。もともと親指が切手の図案になっていたということなのだろう。葉書からは切手の存在は消え、消印だけが

残っていた。その消印の日付は明日とだけ書かれている。するとこの絵葉書はまだ配達されていなかったということか。考えに夢中になって親指の葉脈を舐めそうになり、あわてて指を口から離す。もしも舐めれば、葉脈の図案が舌に写り、それはやがて身体の奥に入り込んでしまうかもしれない。新しい移動命令書が来ても、自分がそこにいなければその命令は執行されず、メゾンの仕組みが滞ってしまうだろう。そう思うと、うかつに体中に切手の模様を広げるのはやめたほうがいいと思えた。

絵葉書に夢中になっていて、郵便配達係に気づかなかった。すぐ横に立ち、顔を近づけて絵葉書を覗き込んでいる配達係の青年は、あやうく私の肩に手を触れようとさえしていた。

「収集時間には早いのではないか」

そう尋ねると配達カバンのポケットを探り、ようやく取り出した懐中時計を目の前に突き出してみせた。もう収集時間が来ているといたいのだと分かった。それで、送りたいものは何もないのだと言い、無駄足だったねと同情してみせたのだけれど、配達人は何も聞いていなかったようだった。まるで医者のように私の左手を取り上げ、手を引く隙もなく、配達人は手のひらをのぞきこみ、葉脈の詰まった親指に目を近づけた。

もっと注意深くなければならなかったのだろう。とどめる暇もなく、配達人は手のひらに隠していた切手を私の親指の上に貼付けた。切手はひんやりとしてとても気持ちがよかった。切手が溶けて親指の指紋の隙間に染み込んでいったときも、これまで感じたことのないほど親指がすつきりとして触覚が鋭敏になり、自分の体温さえはつきりと感じはじめた。どうしてもっと早く切手を貼らなかつたのだろうか、悔やしくて涙がでそうになった。

様子を見ていた配達人がカバンの口を精一杯、広げているのに気づいた。最初は何をしているのだろうかと思ったが、すぐに分かった。私をそこに入れたいのだろう。そして、宛先に配達したいということなのだろう。

私の宛先はどこなのだろうか。そんなことを考えながら、配達カバンに頭から潜り込んで行った。本当に、私の宛先はどこなのだろうか。それだけが疑問だった。